

将軍学

其の6

1 過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる。今までうまくいったからといって、これからもうまくいくとは限らない。反対にこれまでうまくいかなかったも、今からの決意と行動ですべてが決まる。(08.1.11)

2 日々新しい自分を創り出す「自分革命」の心意気で取り組みたい。もうこれでいいと思った瞬間から、前進のエネルギーは失われる。(08.1.11)

3 一番戦ってくださる人を、一番大切にする。そこに何十倍もの力が出る。これが勝利をつかむ秘伝である。(08.1.15)

4 心が停滞した人生には充実はない。人の何倍も忙しくとも、人の何倍も充実した！それこそが、勝利の人生である。その人こそ偉大な人である。(07.12.12)

5 勝利は、苦しみを通じてのみ、得ることができる。苦しみを通り抜けない勝利はない。

大きな苦勞が、大きな栄光をもたらす。(08:1.16)

6 男性のリーダーは、真に、女性のために戦うことである。女性を大切にし、尊敬し、女性の意見に耳を傾けていけば、男性も賢くなれる。これが、賢者の方程式である。男性は女性を護りきる、強い人になって下さい。

7 停滞は、よどみを生む。戦わなければ、私達は濁ってしまふ。常に前へ、前へと進みゆくことだ。味方をつくることだ。傲慢にならず、油断せず、多くの人の意見を謙虚に聞くことである。(08:1.16)

8 対話は「聴くこと」から始まる。相手の心に届く言葉を発するには、まず、相手の心の声に耳を傾けなければならない。対話をするには、何よりも「耳の人」であることだ。

9 「対話」についてロシアの思想家バフチンは「この世に人間が存在するということとは対話的に交流すること」「生きることは対話に参加すること」—— たずね、耳を傾け、答え、同意したりすることである。

10

「対話」は人間にしかできない。対話によって、ホモサピエンスから「人間」が立ち上がる。対話は、心を変える。心が変われば、人間は変わる。人間が変われば、世界が変わる。

11

指導者の人間性が、ほとんど一切を決めます。「人間」を引きつけるのは、本物の「人間」だけです。

12

「恩を知る人になれ！恩知らずになるな！恩知らずは人間ではない。畜生以下である」

13

孫文の不屈の魂の表れは、「十転び十一起き」と言われた。同じ事実に直面しても、捉え方や見方には、人によって違いが出るものだ。その現象の善い面を積極的に見るようにする。これが真の「樂觀主義的」生き方であろう。

14

指導者にとって、一番大事なことは何か。慈悲であり、誠実である。別の面から言えば、信念であり、正義である。この一本の芯があるかどうかである。

15

組織が育つと、人材が育つ。人材が増える。人材が増えれば、さらに、組織は強くなり、大きくなる。組織と人材は、表裏一体である。

16 「努力を怠る」「油断する」「横柄になる」「対応が遅い」「横着」「いいかげん」これらは、すべて「慢」の生命だ。指導者となるために必要なのは、頭だ。根性だ。人間としての大きさだ。「ねばり強さだけが、目標達成への道なのだ」

17 人材は金では買えない。青年が思う存分、働けるように応援する人間が偉いのだ。人一倍、後輩を育てることだ。

18 最高幹部は戦わなければならない。「意気地なし」は「ずるい」のであり、「卑怯」だ。卑怯は結局「敗北」となり、「裏切」となる。いくら長生きしても、真の幸福はつかめない。

19 リーダーは、格好ではない。「情熱」と「正義感」と「慈愛」である。仕事をするこゝでは役職など関係ない。上下もない。優柔不断は、リーダーにとって大きな欠点となる。ずるく、卑怯な人間の優柔不断は、結果として、敗北を招く。正義の人、勇気の人、明快なる人についていくことである。

20 今、時を逃さず、一つの種を蒔くことである。それを、育てていくことである。そして、

この「蒔く」「育てる」という行動を、たゆみなく続けていくことである。

21 私どもが生きている目的は今までよりも絶えずよくなつていくことであります。大目的を目指し、前進し、成長していく。そのなかに、人生の充実も、勝利もある。

22 大事なことは、一人立つことである。そして、具体的に、一つずつ手を打っていくことだ。策ではなく、誠実な手を打ち続けていくことだ。

23 組織を破壊するものは、外部よりも、内部のほうが強い。心して警戒していくことだ。感謝の人は成長できる。恩を忘れた時から、人間の墮落が始まる。恩を知ることが人間の道だ。

24 制度の变革をなすに当たり、試みにやって見たことは必ず失敗する。きっと「やる」と決めたことは必ずうまくいくものである。

25 物事を「頭に入れる」とは、「しっかりと記憶する」こと。それを「腹に入れる」と「事情を理解し、心得る」ことになる。私たちは、知つてはいても、できないことのほう

が多い。しかし、その「知識」を、どれだけ「経験」として生かせるようにするか。「頭」から「腹」へ、それが、本当に「学ぶ」ということだろう。

26 経験豊かな人を、よく「いぶし銀」という。人生で学んできた人の、実力と魅力の輝きといえる。しかし、「いぶし銀は、若いころにギラギラしていたからこそ、輝きが出るものだ」経験は財産だ。が、大切なのは失敗を恐れずに、目の前の課題に挑み続ける心。それこそが、経験を輝かせるものにちがいない。

27 希望は経験によって強化されるが、経験がその源ではない。その源は、今まで人の行なったためしのないことも、行ない得るという確信である。

28 私たちの人生は、いわば、毎日が未経験の連続だ。ゆえに、その日々を「良く生き抜こう!」と前へ進む心が、自身を飾る。

29 今の時代は、「手本なき時代」と言われる。目標となる具体的な人間像が見つからない。その中で、平和と民衆の幸福のために行動する。師を手本にできる人生は、何ものにも替え難い。

30

人間の営みの美しき精華である「文化」は、それぞれの個性の奥に大いなる普遍性を帯びながら、人々を、理解へ、調和へ、創造へと、いざなっていくものであります。

31

また、色とりどりの花々が咲き薫るほど、花園が美しく彩られていくように、文化は、多様性こそが地球を壮麗に輝かせていくことを、教えてくれています。

32

文化を守ることは、人類の宝を守ることでもあります。また、文化を育むことは、青年の心を育むことであります。そして、文化を結ぶことは、平和を創ることでもあります。

33

「青年は『明日の世界』である」そうでなければ、一体誰が「明日の世界」を明るく照らすのか。青年が「大願」に奮い立った時、新しい世紀は始まる。その時こそ、まさに「今」だ。

34

「人生には友情ほど貴重な体験はない」友情を大事にし、友情で人生を勝ち抜いていくのだ。友情こそ、一番、尊い。一番、強い。一番、信頼できるものです。

35

「いつかは目標に達する」というような歩き方ではだめだ、一步一步が目標になり、一歩

一歩が価値あるものにならなければならぬのだ」ゲーテ

36

「確信したものを実行するだけの力は、必ず誰でも持っている」ゲーテ　だれもが、必ず実行する力を持っています。それなのに、途中で諦めたり、嫌になったり、怠けたりしては敗北です。自分を信じて、最後まで「貫く」執念を持つてください。

37

「人間は試練に立ち向かう強い心を、つねにもたねばならない」「不幸、敗北に屈しない勇氣と頑強さ、そして、困難のときこそ、自身を試すという決意なくして、本当の人生を生き抜くことは、難しい。

38

「ありがとうは、奇跡の言葉である。口に出せば、元氣が出る。耳に入れば勇氣が湧く」感謝の心は、自分自身を豊かにする。幸せだから感謝する。以上に感謝するから幸せになるのだ」

39

「人のためにする仕事も、習得するのはあなただ」「仕事に幸せを見い出した人は本当に美しい人」わが使命を果たすために「戦う人」は美しい。そしてまた、「我慢の底は幸せである」

40 他者を尊敬できない「傲慢」、他者を大事にできない「慢心」が一凶である。

41 「寿命」が遺伝的な宿命であつても「老化」は宿命ではなく、意志によつて乗り越えられる。

42 順風満帆の人生など、ありえない。むしろ困難ばかりです。それを乗り越えるには、自分の使命を自覚することです。そこに希望が生まれるからです。

43 「勝たなくてもいいから、負けないこと」「どんな事態、状況になつても負けない一生を」です。「負けない勇氣」「勇氣」がなければどんなに人柄がよくても、人々を守ることができない。偉大な使命を果たすことはできません。戦う勇氣！恐れない勇氣！そして、耐え抜く勇氣です！この勇氣を鍛えていくことです。人と比べて、くよくよすることはない。人生の戦いは長い。途中の姿で、一喜一憂することはない。最後に勝てばよい。

44 人生には、必ず、越えなければならぬ山がある。それが、早い、遅い、ただけです。深い悲しみをかかえ、大きな悩みに苦しみながら、それに打ち勝つてこそ、偉大な人になれるのです。

45 いかなる組織であれ、多彩な人材が生き生きと活躍しているかどうか。また、新しい人材が陸続と育っているかどうか——ここに、リーダーの本当の力量が現れる。

46 人材を出せないのは、どこかに慢心や見栄、保身があるからだ。だからこそ、まず、リーダー自身が、自己の壁を破り、新たな自分へと成長していくことだ。

47 勇気がある者には、信念がある。信念があるものは、信頼される。信頼される者には、大勢の友がついている。だから勝てるのである。勇気の人、信念の人であり、勝利の人である。

48 勇気は、勝つための原動力である。何ものにも負けない人こそ、真に幸福な人である。つきつめて言えば、自らに勝たなければ、真実の幸福は開けない。

49 心強い人にとって、苦労は、ただの苦労で終わらない。苦労は「宝」である。大事なことは、強い自分になることです。「自分したい」で、新たな道を開くこともできるのです。

50 本当に価値ある仕事、歴史に残る事業というものは、目立たない、地道な積み重ねで

ある場合が多いのです。仕事は戦いです。また、自分自身の一念しだいで、仕事を通して、自分を磨き、強めていくこともできる。

51 何があっても、忍耐と自信をもって、強く前進しつづけることだ。「進む」なかで、「動く」なかで、自分にしかできない使命の道を開くことができるのです。

52 「生きる」とは「闘う」ことです。そのために必要なのは「勇気」です。勇気は逆境を切り開く宝剣です。限界の壁を打ち砕く金剛の槌です。絶望の暗礁を照らす不滅の光です。

53 すべての努力は、人生の宝です。一生の宝であり、幸福の宝です。「山越え、谷越え、険難の峰を歩みながら、正しく強く、つくりあげていく人生——そこに幸福があるのです。

54 「自分自身をつくることです。自分の中に、幸福の引力をもつことです。自分が幸福になり、一家も一族も友人をも救っていきけるのです」

55 立場が上になるほど、自分に厳しく、油断せず、慢心を排して、わが尊き使命を全うしていくことだ。人に尽くすのが、新時代の指導者である。

56 どんな人でも、どんな時代に生きても、その人には、その人にしかできない使命があります。特別な人間になる必要はない。有名になったり、華やかな脚光を浴びる必要もない。平凡であっていい。「自分らしく」輝くのです。大切なのは、「私は自分に来ることをやり切った!」と言えるかどうかです。(08.2.29)

57 順境のなかでは、人間の真の力は発揮できない。逆境に真正面から立ち向かっていくとき、本当の底力がわいてくる。逆境と闘うから、大いなる理想を実現することができるのです。

58 勝つために進むのだ。後悔なきために戦い勝つのだ。断じて人生は勝って幸福であらねばならない。墮落と敗北に滅びゆく人生ほど凄まじい苦痛はないからだ。

59 人生は輝いていくことが大事である。いかなる立場であれ自身を最高に輝かせていく心を磨き鍛錬し太陽のごとく生命を輝かせていこう。

60

行動がなければ建設はない。行動なき批判は愚痴に通じ自らを幸福の軌道からはずしてしまふ。「よき人生」は「よき行動」の結果である。「素晴らしき人生」は「正しき行動」の地道な繰り返しの中から、花咲く。

61

小さな自分を越えた「最高の目的」「大いなる理想」に向かつて一生涯前進していく。その「挑戦」の生命に真の「幸福」は輝いている。

62

「人格」こそ勝利の力であり、一生涯通用する最高の「宝」である。それはまた、親が子に残してあげられる最高の財産でもある。

63

「人格の力」「文明の風」「人道の光」で皆に「納得」と「信頼」の対話を広げていく、そこにしか恒久平和への道はない。

64

大きな目的のために「行動」すれば、それだけ自分の「夢」が広がる。大きな「歴史」が輝く。人のために「行動」した分だけ「大きな自分」となる。それはは即「大きな幸福」である。

65

「立場」よりも大切なのは「行動」である。事実のうえで何をしたのか、何ができるのか、何を為しつつあるのか。それだけが問題なのである。人間の価値は「行動」で決まる。

66

人のため、社会のためにと、開かれた「大いなる目的」に向かって働けば「大きな心」「大きな自我」が築かれていく。「大きな心」は即「大きな幸福」を味じわせる心である。

67

「勇気」は「智慧」を生む。友を思う「慈愛」も勇気から生まれる。「勝利」も勇気の実践によってこそ得られる。「勇気の人」が「栄光の人」である。

68

何も苦しみがないのが幸福なのではない。どんな苦しみをも喜びに変えられる自分自身の境涯に幸福はある。その鍛えのなかに充実があり、価値がある。

69

勝つことは楽しい。誉がある、誇りがある。自信が生まれる。負ければ暗くなる。文句も出る。悲しいし、惨めである。ゆえに勝たねばならない。「幸福」は「勝利」にある。

70

「幸福」は「向上」の中にある。たえず「よりよくなっていく自分自身の戦いに」「戦い続ける」、「前進し続ける」人生の中にある。

71 「人間」をつくり「人間」を育てること。それはまさしく「歴史」をつくり「歴史」を育てることである。地味ではあるが、これほど確かな大偉業はない。

72 「人間以上」の人間はいない。皆「人間」である。ゆえに「人間として」光る以外にない。地位や名声、財産などで、我が身を飾つても、それだけは一時の幻影にすぎない。一個の人間として偉大かどうか。ここに、焦点を定めて生きる人生が「一流」なのである。

73 何も苦しみがないのが幸福なのではない。どんな苦しみをも喜びに変えられる自身自身の境涯に幸福はある。その鍛えの中に充実があり、価値がある。苦勞が大きい分だけ成長も大きい。悩みが深い分だけ、乗り越えた喜びも大きい

74 リーダーとは、「だれよりも真剣な人」の異名である。自分が真剣にやらずして「だれかにやらせよう」というのは卑怯である。全部指導者で決まる。人任せでなく「自分が働く」ことである。「自分が動く」ことである。

75 どんな戦いも「最後は、必ず勝つ」と結論をまず決めて、そこに向かって強く、楽しく進んでいくことである。臆病はいけない。樂觀主義の強靱な精神力でいくべきである。

76

人生、全て順調という訳にはいかない。勝つ場合も、負ける場合もある。しかし、仮に一時は敗北しても、自分自身に負けるのが一番惨めである。何があるうと、今どんな境遇にあったとしても自分自身に勝っている限り、その人は「王者」なのである。

77

身分や立場よりも、大切なのは「行動」である。事実のうえで何をしたのか。何ができるのか。何を為しつつあるのか、それだけが、問題なのである。人間の価値は「行動」で決まる。

78

「喜び」と「希望」を皆さんに、これがリーダーの要件である。「喜び」のあるところ、人は勇んで「行動」する。「希望」のあるところ、人は「持てる力」を発揮する。「向上」と勝利のリズムは、そこに生まれることを忘れまい。

79

人を育てるならまず、「自分」を育てよ。「行動」に、人はついてくる。「姿」に人は学ぶ。「境涯」と「振る舞い」が人を感動させ、感動が人を変えるのである。自分が成長した分だけ、人生は楽しい。

80

「心こそ大切」である。状況がどうあれ、自分自身の胸中に、「戦う心」が燃えている

かどうか。何があろうと「戦う心」燃やし続けたその姿が人間としての「勝利」なのである。

81 人間はたった一言の言葉で悩むこともある。傷つくこともある。また、安らぎも感じれば、勇気を奮い起こしもする。ゆえに、言葉が大事になる。言葉への気遣いは人間としての配慮の深さにほかならない。

82 人間の真価というのは、学歴や立場肩書によって決まるのではない。信義を守るかどうか、誠実であるかどうかである。真剣であるかどうかである。そして、信義の人、誠実の人、真剣の人には、人間性の光彩がある。その人間性は、人の心を開き、必ず触発をあたえていく。

83 大事なことは、どこまでも粘り強く「努力、努力」で自身の限界を一つ一つ打ち破っていくことです。もうやめようと、そう思ってから「あと5分」「あと10分」と頑張れるか、こうした毎日の挑戦の繰り返しが大きな力となっていくのです。

84 困った時に助けるのが友情です。順調な時はいいが、状況が悪くなると離れていくの

は友情ではない。尊敬できるよき友人を持つこと。そして、自分自身も尊敬に値するよき友となっていくことです。

85 常に、若々しい「心」で、生き生きとした「行動」で、はつらつとした「声」で、進みゆくことだ。喜べる人は幸福である。文句を言うばかりでは幸せにならない。

86 新しい人材が台頭するところ、新しい時代は開かれる。若きリーダーを立派に育ててこそ、未来の勝利は決定されるからだ。

87 向上を求めようもしない生き方を続けているうちに、訓練期間はたちまち逃げ去ってしまふ。若き日に訓練を受けた人は勝利の軌道を進みゆける。

88 どんな分野であれ、一つのことを成し遂げようとすれば、自分の限界との戦いに行き着く。努力し続ける先に成功への道も開けてくる。まさに自分との戦いが勝敗の分かれ目となろう。

89 他人にどう見えるかということよりも、むしろ自分自身の中でどんな人間であるかを

気にする。他人の評価ではなく、自分として満足できたかどうか。それが問題である。

90 指導者には、勇氣、正義、常識、寛容、礼儀が求められる。大衆と共に語り、大衆のために戦い、大衆の中に死んでいく。という決意が不可欠である。

91 一人の人と誠実と信義で結ばれていくならば、そこから、友情の輪は幾重にも広がっていくのである。一人を誠心誠意大事にすることだ。

92 本当の価値あるものは金では買えない。と言っても過言ではあるまい。人間としての信頼も本当の愛も、金で買えるものではない。人の器の大きさは、国益、人類益を本当に考えることができるかどうかによつて決まるといってよい。

93 勇氣をもつて行動していくことです。対話には、勇氣と決断が大切である。まず、断じて語り合おうと心を定めて懸命に時間をつくり出すのである。そして、対話が実現したら、恐れずに真実を語るのだ。それが、本当の友情を育んでいく。

94 対話は、人間と人間を結ぶ。お互いの理解も、この対話を通して広がっていく。対話には、

勇気が必要である。そして、相手を包み込む人間の温もりが求められる。

95 対話には納得と共感をもたらす智慧と情熱が必要である。いわば、対話力とは、総合的な人間力の結実といってよい。人間は対話への挑戦を通して自分を磨き高めていくことができる。

96 戦いとはスピードである。限られた時間のなでどこまで頑張れるかが勝負なのだ。「時は得難く失い易し」だから「いつかやろう」というのではなく、常に時は今だ。と決めて行動を起こしていくことだ。一瞬一瞬を真剣勝負で。

97 会うということは友好を開くことだ。対話することは心の橋を架けることだ。大切なことは、今日から何をするのか。今から何をするかである。

98 相手の考えを正しく知り、理解してこそ、さらに、深い話し合いが可能となるからだ。相手の話をいかに引き出すかに対話の重要なポイントがある。

99 労苦を共にすれば、互いの本質が見えてくる。辛酸が人の真価を試し浮き彫りにする

からだ。人への思いは具体的な心遣いの中にこそ現れるものだ。

100

勇気の一步を力強く踏み出せ。動けば心は軽くなる。爽やかな振る舞いに信頼と友情が広がる。揺れ動く人生は不幸だ。嵐に動かぬ自分をつくれ。

101

前進の人たれ、希望と勇気を漲らせよ。停滞の人となるな。後悔の日々を排せ。大満足の人生を勝ち抜け。

将軍学

其の7

1 一流の人格の指導者は、決して「へこたれない」。また「人を妬まない」。前へ進む人、成長し続ける人には他人を妬んでいる暇などありません。人を嫉妬するのは、自分が前に進んでいない証拠です。成長していない証拠です。

2 偉くならうが、偉くなかろうが、どんな立場でもかまわない。とにかく、自分自身に勝ちなさい。自分自身が悔いなく、満足できるような人生を生きなさい。どんな時でも希望を持って進んで欲しい。

3 根を深く下ろし、基礎を固めてこそ、大業は成る。これは永遠不滅の道理です。汝自身の使命の地盤に、深く根を張ることだ。人を妬んだり、うらやんだり、他人の格好ばかりを見て、自分を忘れてはいけない。

4 幸福になるのも自分、勝つのも負けるのも自分です。じつくりと基礎を固め抜いていった人が、最後は必ず勝つ。決して焦ってはならない。

5 人の歳月は急行列車のごとく過ぎ去っていくものだ。忘れさられることも多い。若くして死んでいく人もいる。昨日まで栄光の人生に見えても、今日は灰色の空しい人生に変わる。満たされぬ思いで一日一日を、後悔しながら生きる人もいる。

6 そして、待ち伏せていたような大きな災難、事故によって倒れてしまう人もいる。最終章の人生を勝利し、栄光輝く歴史をいかにすべきかそこに多くの哲学は誕生し、多くの宗教が立ち上がった。著名でありながら卑劣にして不幸な人間も多い。

7 未来は、精一杯努力する人たちのものである。血のにじむような、努力と苦闘のなかにのみ成功はあるのだ。

8 人生は挑戦です。努力です。勉強です。工夫です。その積み重ねのなかに勝利があります。

9 やっぱり人生には目標がしつかりとあったほうがいい。目標には年齢は関係ない。経済的に豊かになっても、人間が欲望の奴隷のようになってしまえば、社会は殺伐としたものになってしまう。

10 目的のない人は、心が右往左往する。善悪が知らず知らずのうちに失われていく場合がある。真の幸福は財産でもない。社会的地位を得ることでもない。人気の人生を流離^{さす}っている幻の姿でもない。

11 「勝たんと欲すれば、苦しむことを学べ」「逆境が英雄をつくる」「凍てつくような逆境を味わっていない者は、人生を過ごして苦勞していない者」これは本物の人間ではない。
(08.5.30)

12 要領だけの人間、行動なき人間は、人の上に立つ資格はない。上になればなるほど、人の何倍も働くのは当然だ、そうでなければだれもついてこない。

13 まず最初に何になりたいのか、何でありたいのかを明確に決めよ。目標を決め、絶対に成し遂げるという一念を定めよ。そうすれば道は必ず開かれる。

14 苦難に負けまい、胸を張って進もう、勇気で人生を勝ち行くのだ。「人の心を動かすものは、策でもなければ、技術でもない。ただ誠実と熱意である。」

15

「池に小石を投げれば波紋が広がります。その波紋は小さくなっていきましたが、完全に消えることはありません。そして、どんな人にも、社会を変えていく、この波紋を生み出す力があるのです。」いわゆる、偉い人が時代を変えるのではない。有名人が偉いのでもない。どんな人にも変革の力がある。

16

親切であるということ以外に、立派な人間であることの証拠はありません。親切心や思いやりの心こそ人間性の発露である。

17

現状に甘んじていれば、人間の成長は止まる。常に前を目指して努力するところに成長は生まれる。より前へ越えるべき壁は今の自分である。

18

リーダーは気取を捨てることである。勝利の執念をもつことである。リーダーは颯爽として生き生きと前進していただきたい。覇氣のない、独りよがりの冷たい人間にはだれもついてこない。

19

我慢という言葉——「忍耐」の意と共に仏教用語の視点で「自分を偉く思い、他を軽んずること」という解釈がある。

20 我慢とは外面的に耐え忍ぶ姿を保ちつつ心の中では自分を偉く思い、他を軽んずる感情が渦巻いている。その両面を示している。

21 同じ人生を生きるのであれば、勝った方がいい。胸を張って偉大な境涯で悠々たる人生を歩んでいったほうが得である。

22 「主義なき政治。労働なき富。良心なき快樂。品格なき学識。倫理なき商売。人間性なき科学。犠牲なき信仰。」M・Kカンジン」

23 人のため、社会のために生きる。それが人間にとっての基本である。人に尽くすことこそ、実は自分を生かす道であり、他の人を顧みないことは実は自分自身を傷つけていることである。

24 人生は「誠実」でいけ。人間としての大道を堂々と歩め。誠実こそ、人間として最も尊い永遠の勝利の大道なのである。

25 「真剣」でなければ、未来は開けない。「真剣」でなければ、大事業を達成できるわけ

がない。「試練」に行き当たった時こそ、前進の炎をさらに燃え上がらせて、生きて生きて生き抜くのだ。

26 どのような状況にあっても、自分が変わり、自分が成長し、自分が責任を持てば一切を開いていける。要は自分だ。自分自身に生き抜くことだ。すべては自分自身で決まる。

27 偉大な事業をなすためには、幾多の障害があつて当然で、その時こそ、自らが逞しく鍛えられ、光り輝くことを忘れてはなるまい。実に、苦難は人生を闇から暁へ、混沌から秩序へ飛躍させていく回転軸なのである。

28 「組織」という言葉は、あるいは「同志とともに」と言い換えてもよいかもしれない。誰れ人も、自分ひとり道を進むことは出来ない。道をあやまたずに進むことはさらに困難である。そこに組織の重要性がある。

29 組織は人間から出発し、人間に帰着する。その組織あるゆえに情弱な自分を支えてくれるということ忘れてはならない。

30 幹部の皆さんは、常に生き生きと進んでもらいたい。また、周りから好かれる存在であっていただきたい。理屈ではない、感じのいい人格が光る人であってこそ皆もついてきてくれるのだ。

31 困難において力となる真の友がいるかぎり、どんな不幸も乗り越えることができる。人生にとって大切なのは、友である。親友である。同志である。

32 対話のために必要なのは、「聴く力」である。具体的には、①相手の目を見る②相づちを打つ③微笑を忘れない④「くだったんですね」と相手の話の内容を繰り返す

33 反対に無表情、無反応な人に話すほど苦痛なことはない。真剣に「聴く」ことは、相手の人格を尊重することに通じる。「語る力」と共に、「聴く力」を大切にしたい。

34 人の肉体を殺したら、罰せられるのに、人の心を殺しても罰せられないのですか。
矢口敦子 著（償い）

35 「きれいにできない泥水はない」人は必ず道を変えることができる。成功する人とは、

常に新しいことを息吹にあふれている人であります。

36 新渡戸稲造に学ぶ（世渡りの道）

- 1 気取るな
- 2 ありのままであれ
- 3 商売気を出すな
- 4 お世辞を言うな
- 5 卑下するな
- 6 人により言葉をえらべ

7 相手から学ぶように心がけよ

37 偉大な人は、決して負けない人である。諸君も「負けない人」になっていただきたい。
苦しくとも最後に勝つ。この気概で生き抜くのだ。

38 戦いにおける「将」の指揮とは、ただ大きい声を出し、命令するのではない。それでは皆が困ってしまう。皆をリードするといことは自分自身の本当の「誠心誠意」を示す、かたちにするということだ。

39 まず私がやる、全責任をもつ。だから一緒にやろう、この心を将がもっていなければ、

どうして他の人々が動くだろうか。誠心誠意でこれを心に刻んでいただきたい。それでこそ勝てる因をつくっていきけるのである。

40 人生という勝負の厳しい鉄則は、いつの時代も変わらない。「負けるに決まっているだろう」「勝てるわけがない」と言われた戦いを勝つ。そういうトップの結果を残すことだ。

41 人生は勝負である。勝って、勝って、勝ちまくるのだ。自らの力を振り絞って、気取りや、人まかせの心があれば、勝ち続けることはできない。

42 いったん「やる」と決めたならば、一生懸命戦う。断じて勝利する。そこに幸福の土台が築かれ大きな喜びの花が咲く。

43 朗らかに生き生きと「対話の花」を咲かせていきたい。「友情の花」「勝利の花」を咲かせて、自分自身が満足できる人生を飾ろう。

44 超えられない試練など絶対にないのである。ゆえに恐れるな、断じて恐れるな！勇気を持って堂々と進むのだ。

45

「成功」とは成し遂げること、進むこと、前進することを意味する。たとえ一時は成功をつかんだように見えても、油断したり、立ち止まってしまえば、すぐに後退が始まる。敗北に向かつて堕ちていく。前進し続ける人が真実の成功者です。前進の中にこそ、成功があり、勝利があり、幸福があるのです。

46

今、地球社会の全体が長く暗いトンネルに入ったごとく混沌の時代が続いている。こうしたなかにあつて、人類が心も新たに踏み出すべき一步はいつたいなにか。

47

「人類にとって、いまだ使用されていない資源がある。それは、人間自身である。」人間自身の生命こそが最も身近にして最も確実なまた最も持続可能な資源なのであります。

48

この内なる生命の大宇宙こそ、21世紀の人類が勇敢に挑むべき「ニューフロンティア」（新たな開拓の最前線）である。そしてその開拓を成し遂げゆく最も崇高な聖業こそ教育ではないでしょうか。人間の無限の成長こそが教育の目的であります。

49

人知れぬ努力を積み重ねた分だけ、人格は磨かれ、自身も光る。輝かしい人生の栄光

も勝ち取ることができる。

50 来る日も来る日も最大の辛労を尽くし、どうしたら勝てるのか、人知れない場所で心を尽くし、地道な努力を続ける見えない闘争ありて、地域や社会を照らす人生の勝利者となれるのだ。

51 我慢の底は幸せである。

52 未来に永遠に残るものは、手抜きや要領では決して築くことはできない。人間が命をかけたものだけが不滅の輝きを放つのだ。

53 「これからの時代は対話の時代になる。」一流の人間と、どんどん会っていくことだ。人と語るといことは、人格をかけて戦うということであり、それがあってこそ信頼を結び合えるのです。

54 勝負に勝つためには、何が必要か。

① 第一に自分の行っていることに対する「信念」「確信」

② 第二に着手した以上、やり遂げる「固い決意」

③ 第三にベストを尽くす「まじめさ」「真剣さ」そして「努力」

55 人は苦勞も悩みもないから、笑顔になるのではない。何があっても負けない心があつてこそ美しい微笑が生まれる。そして、その微笑から幸福が光り平和が広がる。

56 希望こそ、前進の原動力である。「理想」とは志である。自ら打ち立てた志である。志を打ち立てたということは、時と場所と出来事にかかわらず揺るぐことなく、そびえ立つのである。

57 大事なことは出会いです。幼い心によき思い出の種子が植えられれば、それはいつしか芽を出し友好の花を咲かせます。そして平和の実を結びます。

58 種を蒔かなければ、花は咲きません。実を結びません。機会があれば全力で種を蒔き続けることです。

59 人間的であることは、人への感謝の心を持ち、率直にその気持を伝えることである。

感謝なき人間主義もなければ、自身の思いを表現せぬ無表情の人間主義もない。

60 今や交通網、通信網は目覚ましい発達を遂げ、物と物、情報と情報の交換はあるものの、人間と人間、なかんずく、心と心の交流の希薄さは、大きな問題である。

61 希望を生み出すことは、価値を創造することである。勇氣の火をともしることである。

62 戦いはスピードだ。速さが勝負だ。行動が遅れ、打つべき時に手を打ち損なえば、未来に敗北を招くことになる。それぞれが迅速に、今日の使命に生き、今日の課題を完璧に果たし抜いていくなかに勝利はある。

63 自分がすべてを担う、主体者、責任者の自覚に立つ時、勇氣がほとばしる。力が出る。英知がわく。執念が燃え上がる。また、その勇猛果敢な実践のなかに生命の躍動と充実と幸福がある。

64 「歴史は前に向かつてしか進まない」希望、満足、充実は前にしかない。見栄っ張りではない。とくに男性は「王者の風格」をもたなければならない。

65

指導者は絶対に気取ってはいけない。男性は見かけではない。結果が第一だ。うわべをつくり、策を弄する人間、増上慢の人間が「組織」を破壊する。指導者は本来ありのままの姿であるべきだ。

66

人生も社会も、激しい変化の連続だ。やりにくいこともあるかもしれない。思うにまかせぬこともあるだろう。しかし、すべては未来の勝利の因と確信し、一日また一日と「成長の黄金の日記」を、心晴れ晴れと綴っていく。

67

大事なのは本物の決意に立った人間である。本気の人間がいれば、すべての人を引っ張っていける。中核が大事だ。リーダーで決まる。

68

才能は、人生において、どう花開き、実を結ぶか分からない。ゆえに、一時の成功や失敗をもって、才能の有無を言うのは浅はかだろう。

69

大切なのは、誰でも才能が芽吹き成長する可能性の大地を自分の中に持っているということだ。

70 人生でさまざまな困難に出合う。が、それを乗り越えるたびに、きっと何かの才能を鍛え生かしているのだと思う。挫けず前を向いて進む限り、才能は必ず磨かれる。

71 何事も、根本は「人間」だ。「人間の心」である。その「心」に明るい希望を、生きる喜びを、負けない勇気を贈り続けること、ここに勝利の原動力がある。

72 どんな戦いにおいても、まず自分が負けないことだ。まず自分が真剣になることだ。そこから一切の道が開かれる。

73 戦いはこれからだ。必ず勝つのだ。我らに開けぬ道はない。我らに破れぬ壁はない。勝利できぬ戦いはない。戦おうではないか、そして勝って勝ちまくるのだ。勝って勝って、深く大きい、歴史を残すのだ。

74 本当に親孝行した人が、本当に偉くなっていくのです。「大勝利」と「成長」は一体不二なのです。人間は皆、幸福になるために生まれてきたのだ。

75 同志——それは何よりも、人生の向上の源泉となる。嵐の時の助け合いの力となる。

76 「男は師子であれ」「人生は師子のごとく」「苦難に耐えることを知る人間は不幸になるわけがない」人生は戦いです。戦ってこそ、不動の自分ができる。

77 大事なものは、人間としてどれだけ成長しているかだ。自身を鍛え、わが生命を磨いていくことこそ、真の充実の人生が輝くのである。

78 苦勞をしなければ、人間は鍛えられない。また、本当に苦勞して戦ってこそ、真実の喜びや満足が得られるのである。

79 リーダーは、いくつになっても、若々しく進むのだ。胸を張って、張り切って、自分が生き生きしていれば皆も元気になる。

80 王さまが、敵の將軍を打ち倒した「矢」を重宝して神殿に捧げることにした。しかし、その決定を知った「弓」は言った。「弓があつたから、矢がとべたのさ。」と。

81 勢いよく飛ぶ「矢」を見て讃える人は多い。しかし、その「矢」を飛ばしてくれた「弓」に目を向ける人は少ない。いかなる戦いの勝利にも、人知れず、原動力となった「弓」

のような功労者がいることを、忘れてはいけない。

82 どんなに時代が暗くとも、わが心から、明るい希望を生み出すことができる。どんなに世間が殺伐としても、わが家から慈愛の温もりを広げることができる。どんなに社会が混乱しても、我らは人間の魂を誇り高く輝かせていくことができる。

83 大事なのは行動だ。何もしなければ、何も変わらない。一步を踏み出して、行動を起こしていくところから、すべてが始まる。智慧が生まれ、状況も好転していくのである。

84 大事を成すためには、遊び半分では絶対に勝てるわけがない。勝つために信念を貫くのだ。勝つために智慧を絞るのである。勝つためには死力を尽くすのだ。

85 何であれ、人の何倍も悔しい思い、苦しい試練に耐えながら、戦い抜いてこそ、富士の如く屹立した人格ができる。烈風を受けるなかでこそ、何ものにも揺るがぬ自分自身を鍛え上げることができるのだ。

86 一日一日の勝利が、一年の栄光を決する。目標を明確に！たゆまぬ前進で新しい年を

勝ち取れ！誰かではなく、自分が先陣を切れ。

87

人生の本当の勝負というものは、老境にいたって決まるものである。最後の姿がその人の人生のすべてと言える。半生を一つの砥石として磨き上げた清冽な生命の輝きが、そのまま昇華されていくわけです。逆に怠惰と憂鬱の半生は、その老いの姿にもまた、不幸な影を宿しているものです。

88

老いの美しさ。美しく老いることは、人生のいかなる時期の美しさよりも「人生の秋」であり、その美しさは「紅葉」の美しさではないか。「老いの美しさというものには、ある深さがこめられている。」

89

青春とは、たんに年齢的な、または、肉体的な若さというもののだけのものではないと思います。青年期の信念を死の間際まで貫き、燃やし続けるところに真実の青春の輝きがあると考えます。

90

「今日よりも明日、今月よりも来月、今年よりも来年」と、いよいよ決意も新たに励むことが、一年の計の基本であり、一生の計の根本となる。

91 若者には、「再生への適応力」があり、「新しい考え」を実行し、前進しながら自らを変革できる。積極的な生き方ができる。

92 どんな苦難にあつても「負けない心」「強い心」があれば、必ず壁を破っていくことができる。たくましく樂觀主義の人生には敗北はない。必ず最後の勝利をつかむことができる。

93 悪人はずるい。悪は悪を呼ぶ。その悪を見て見ぬふりをする人間もずるい。悪に對して黙ってはいけない。戦わなければならない。

94 新しい人材が台頭するところ、新しい時代は開かれる。若きリーダーを立派に育ててこそ、未来の勝利は決定されるからだ。「向上を求めよう」としない生き方を続けているうちに訓練期間はたちまち逃げさつてしまう」

95 人を引っ張っていくには、名誉欲と金欲をかなぐり捨てることだ。これらを捨てた人間ほど強く、いい意味で手のつけられぬものはない。真実を叫び、正義に生き抜くのに何の制約があるものか。何の遠慮がいるものか。

96

会うと楽しい、会うと元気になる。会うと新鮮な触発を受ける。会うと戦う勇気がわいてくる。個人であれ、団体であれ、快活なところ、勢いのあるところ、豊かな精神性があるところは強力な「磁石」をもっている。その周りに、必ず勝利と前進の足音を広げていくものだ。「生き生きと生きよ！」人生の達人、ゲーテの言である。

97

現在の日本の全般を見て「なんとなく物足りない」何もかもが一応整っているように見えるが、なんとなく頼りなく、底が浅い。その原因は「人」にあると。

98

「個々の職責にいる人が生き生きとして、はちきれるような元気がない」「命令だからまずやるんだ」「命令がなければ与えられた職責だけを他人に指摘されない程度にやっていたらよいというのがだいたいの姿である」と、この現状を変革するには、「信念の人」を作るしかない。

99

「ペンは剣より強し」そして「声は砲弾より強し」である。内村鑑三は語った。「同じ舌を以って語る言葉に、尊きもあれば、卑しきもある。人を活かすのもあれば、殺すものもある。世に言葉ほど安価にして言葉ほど高価なものはない」

確かに、声はタダである。それでいて人間として最高無上の仕事ができるのだ。「言葉」がなければ人間もなく、ただ「幻影」があるのみだ。

「信念」があるから、声に力があるのだ。

「誠実」だから、相手の胸を打つのだ。

「勇気」があるから、悪に勝つのだ。

青年なき社会は灰色だ。青年こそ人類の宝である。青年を愛し、青年の活躍の道を開くところに、未来の希望は洋々と広がる。

取り戻すことにできない青春。最大限に障害を乗り越え、生きゆかんとする人生。人それぞれ使命があるだろう、生き方があるであろう。宿命に流されていく人もいるであろう。悩み疲れて、この人生を終わってはならない。勝利の人生であらねばならない。

同じ太陽に照らされ、同じ日々を送りながら、一生というものはさきまである。共通の道を歩みながら、同じ結果が出ないという矛盾もあまりにも多い。ともあれ、この世に生をうけた以上満足に生きねばならない。幸福に生きていかねばならない。

苦しい現実から、また、過酷な現実から幻想を追ひ払い、唯一最高の青空を仰ぎながら、満ち足りた充実の一生を、生き抜いていかねばならない。

将軍学

其の 8

1 学校の優等生がかならずとも社会の優等生とは限らない。日本の学校は全科目で高得点を取らせる教育だ。しかし社会に出てからは、平均点よりも、一つでも90点があったほうがよい。一芸に秀でることだ。

2 困難の時は、情勢を冷静に分析し、その上で「会社はどうすれば生き残れるのか」「自分でできることは」と知恵を絞り、努力をすれば、ピンチは必ずチャンスになる。周囲が変わって、自分が変わるのではない。自分が変わって周囲が変わる。周囲が変われば世界も変わるのだ。

3 「人の信用を得る根本は約束を守ることだ。何を犠牲にしても、絶対に約束をがっちり守ることにより、信用が得られる。これは青年の絶対の社交術である。

4 できないことはできないと、はっきり断る。引き受けたら、絶対にやる。これが信用の根本である。金はかからない。

5 人材育成について「人材を輩出させるためには忙しくさせるのだ。そうすれば組織が若返る、その中で人材が育成されるのだ。

6 物の見方に全体観と団体観——高い視点から全体を見渡すべきであり、自分の団体だけに固執してはいけない。

7 人が成長するために必要で、今の社会から一番失われているものは何か。それは「元氣」である。人は生命に弾むような躍動感がなければ、前に進めない。他人と言葉を交わすにも元氣が必要だ。「元氣」を取り戻すというのは「本来の自分らしさを発見して、それを堂々と表現することである。」

8 組織は古くなった時にはどうすればよいか。何かの形で刷新し、時期が来たらすぐに組織を作るのがいいだろう。常に新しい会社でなければならぬ。どこまでも組織は若々しく、新しく。

9 人間は人間以上に偉くはなれない。人間以上の特別な存在になる必要もない。人間が人間として最も人間らしく光り輝いていく、これが一番大事なことでないでしょう

か。

10 青年は「実力」です。「虚栄」ではない。「実力」で勝つことです。「智慧」と「人格」で光ることです。人の何倍も苦勞し、実力で道を開いてきたリーダーであればこそ、多くの庶民が心から共感し信賴するのです。

11 後悔には、2種類あるという。「何かをしてしまった後悔」と「何もなかった後悔」。しなかった方が「私たちの心を長い時間かけて酸のように侵食して、私たちを廃人に追い込むものだ。

12 人生の勝負は長い目で見なければわからない。青年は「これだけは負けぬという一剣を持つ」

13 声は力だ。声は命でもある。いざという時の「確信の声」の響きほど強いものはない。

14 試練に向かう指導者の絶対不可欠の要件は何か、「勇氣」と「自信」を自他に奮い立たせる力である。

15

最悪の逆境こそ、最高の栄光の歴史を創るのだ。最大の強敵こそ、最強の底力を発揮させてくれるのだ。いかなる無情の現実にも「何はともあれ必ず勝つ、勝利こそが我らの天命だ」と深く、固く心を決めることだ。

16

リーダーの金剛の一念から、歴史は動き始める。大事なのは行動だ。あれこれと議論していてもそれだけでは何も変わらない。「勇気の行動」この不断の積み重ねが、一切の壁を打ち破る原動力となる。

17

男の嫉妬心は恐ろしい。「妬み」は人の心を狂わせる。「破壊の心を生む」「他者の心も破壊し、自分自身も破壊してしまふ」恐ろしい感情である。

18

激動の時代である。勝負の世紀である。自分の足元を固めた人が勝者となる。これが鉄則である。要となるべき人間が意気地なしであつてはならない。リーダーが先頭に立って、いかなる大波も乗り切らなければならない。

19

戦いというものは、自分でつくるものだ。それを乗り越えていくのも、ほかならぬ自分である。困難を避ける人間には何もできない。困難の時ほど燃え上がる、これが正

義の精神である。

20 私たちは、日々自身の課題に挑戦しながら生きている。それは、自分を飾る作業ではなく、自分を磨く努力だ。大切なものほど、なかなか見えない、しかし見えている人はいるものだ。

21 少年が得意げに聞いた。「世界で一番偉い人は？」母は答えた「食べ物を作る人」どんなに偉くても、食べなければ生きていけない。人生に苦しむときでも食べなければ悩めない。

22 高慢な人間は力がない。それどころか、焼きもちを焼いて憎む。これこそが、良き世界を壊す元凶である。

23 真の幸福とはなにか、それは虚栄に惑わされてはつかめない。自分らしく、自分自身に生ききれと。どんなに外見を飾っても、清らかな心がなければ、真の美しさは輝かないのである。

24

なぜ「現代」はこんなにも生命が軽んじられる社会になってしまったんでしょか。一次元からいえば、それは人々が自らの命を賭しても悔いがないと思えるだけの大切な「理想」や「目的」を見失ってしまったからです。

25

本来、自分の命を捧げて貫く道をもった人は、自分や他人の命の尊さを心から実感できるものです。逆に、自分を律し、高める道を持たない人は、エゴや欲望や臆病などの激流に翻弄され、些細なことで虚しく命を落としかねない。

26

良き友を持った青春に停滞はない。真の友と励まし合う人生、敗北はない。友情の深さ、誠実な行動、同志の心のつながり、これこそ人生の究極の魂だ。

27

「歴史は人間が作るものである」人生は過去に囚われるものではない。いな囚われてはいけない。充実とは汝自身に勝つことだ。

28

「言葉話すのは口です」(くち)「心の強さを表わすのは意志です」(いし)「これを濁らせてはいけません。濁点を打てば「ぐち」(愚痴)と「いじ」(意地)に変わります。「徳」(とく)も「どく」(毒)になる。

29 誠心誠意、相手のことを考え尽くそうという努力と行動は、必ず開発の成功と信頼を生むからです。

30 自身を完全燃焼させ、その時々^々の自らの課題に懸命に取り組む人にとっては、苦闘などという思いはない。あえていえば、それは歓闘といえるかもしれない。

31 自らの使命に生き抜こうと、そう一念を定めた時、人生は見る見るうちに輝き始める。「心」輝けば「人生」も輝く。「心」暗黒なれば「人生」も暗黒である。

32 傲慢な人間は滅びる。孤立した人間は倒れる。良き友との連帯が、いかに大切であるか。力は結合から生まれる。創造には、人との切磋琢磨が不可欠だ。

33 「対話」を忘れたとき、人間であれ、宗教であれ、独善となり、偏狭となる。それでは、もはや新たな活力は望めない。「人生に関する問題は対話でなくては通じない。」

34 烈風が吹き荒れるような社会の状況である。しかし、大変な時の戦いだから大きく成長できる。苦悩の渦巻く現実の社会から逃げるのではない。たゆまざる挑戦と行動に

よって、自ら日々、新たな世界を築き上げてゆくのだ。

35

大事なものは「心」である。戦う「魂」だ。そこから全ての変革が始まる。今、この時を戦い開いていく役目がある。友のために「頭」を使い、「心」を使う。それが真実の指導者である。無慈悲であってはいけない。リーダーは深き包容力を持たねばならない。

36

現実には、誰れ人であっても、苦悩との戦いである。断じて負けず、あきらめず、強く耐え抜くところに幸福の花は咲く。

37

決して、あせることはない。じっくりと「時」を創り、幸福と勝利を開花させていく、その究極の力と智慧を出すことだ。「生活の上に、いろいろな試練が出てきても負けてはいけない。」

38

よき友、よき同志に守られた人生は、絶対に負けない。焼きもちを焼いてはいけない。人生において一番気をつけるべきである。嫉妬の人は、伸びない。妬んでばかりの人とつきあっても何の得もない。

39 リーダーの心構えについて、無責任で自分勝手な人まかせのところがあつてはならない。リーダー自身が、苦しんでやり遂げたものだけが輝くのだ。中心者が要領を使い、楽をすれば、まわりも真似し始め、組織を壊す。

40 責任ある立場にありながら、自分自身が苦勞を避ける指導者は、最低であり、危険である。トップが自覚し、責任を持たなかったら、組織は崩れる。

41 出来上がった組織のなかで役職に就いても、本当の苦勞を知らなければ、人間は磨かれない。「人間」どこまでも「人間」である。皆、等しく尊貴でかけがえない使命がある。これを決して忘れてはならない。

42 行動をする「時」、それは「今」である。そして、一步一步と着実に歩みを進めてこそ、わが人生の勝利の金字塔を打ち立てることができるのだ。「時」を逃してはならない。絶対に悔いを残してはならない。

43 スッキリと語る。ハッキリと訴える。相手がよくわかるように、心に入るように言葉を尽くすのだ。声は力だ、声が弾丸である。力強い声は、皆の心を大きく広げる。温

かい声は、友の心を開かせる。

44 リーダーの確信ある声の響きは、友を勇気づける。運命を開くのは自分だ。「自分自身に生きよ」幸福の泉は、わが胸中にある。

45 勝つための人生だ。仲良く朗らかに、声を出し合い、声をかけ合いながら、健康第一で自分自身の勝利へ向かって前進することだ。

46 人は励ましによって使命を自覚し、奮い立っていく。指導者とは、我が生命を注ぎ尽くして、励まし続ける人のことである。

47 「常に鏡を見つめ、自身に問いかけ、自らに誠実でありなさい」自分自身の信念と誠実さを持ち、他者への尊敬の心と忍耐を持ち、そして謙虚であるならば、この人生において、何も恐れるものはない。

48 人生は、一生涯「学び求める心」を持ち続けた人が勝つ。勝利者になる。敗北者はわびしい、暗い、みじめだ。負ければ何を言っても愚痴になり、言い訳になり、焼きも

ちになる。

49 教育ほど、世界を照らす聖業はありません。時代の闇が深いほど、教育の真価は光っていくものであります。

50 今、世界の直面する危機を乗り越えゆく智慧も、エネルギーも、究極的には人間自身の生命の中にしかありません。

51 その無尽蔵の可能性を開く鍵、それがまさに「教育」なのであります。この「教育」という一点において、人類は一段と広く、強く、そして深く連帯すべき時代に入りました。真の教育は、何ものにも負けない人材をつくる。この一点が大事なのです。

52 勝つための要諦は、異体同心の団結です。「団結すれば、堅固になる。分裂すれば、崩壊する」自分勝手や、わがままな人間が増えれば、どんな国も分裂し衰退していく。

53 人生は、心一つでどんな色にも変えられる。心を磨くことが大事である。

54

今までがどうであれ、未来を創るのは自分自身の「心」である。環境がどうあれ、希望を生みだしていくのも、周囲を変えていくのも、これまた自分自身の「心」ではないだろうか。

55

「元氣を出しなさい」今日の失敗ではなく、明日の成功のことを考えるのです。「幸せの扉が一つ閉じるとき、新しい扉がまたひとつ開くのです。それなのに、しばしば私たちは、閉じられた扉を長く見つめすぎて、私たちに向かって開かれている扉を見ないのです」(ヘレン・ケラー)

56

「子ども救え」すべての大人が「21世紀の第一優先課題」とすべきではないだろうか。世界では、今も地震で死んだり、手足を失う子どもが後をたたない。20世紀の初めで戦死者の多くは軍人だった。しかしその後は、子どもや女性を中心とする一般市民が99%になった。20世紀は、「最大に母と子どもを犠牲にした世紀」だったのである。

57

子どもたちは「鏡」である。大人の生き方を映す「鏡」なのである。一家庭にあっても、世界にあっても。

58

「非暴力」とは単に暴力を使わないというだけではない。暴力は、問題や対立の原因を「人のせい」にするとそこから生まれる。非暴力とは、その反対に「まず自分が変わろう」とする生き方なのである。そういう心があれば社会も家庭も、どんなに平和になることだろう。

59

目は見えても、目の前にいる家人の心さえ、なかなか見えない。目の前の、子どもの可能性が見えない。未来に向かって洋々と開かれた「人生の新しき扉」が見えない。見えないで、だめだと決めつけあきらめている。そういう人生はもったいないのではないだろうか。一番素晴らしく、一番美しいものは、目で見ることもさわることもできません。それらは「心で感じる」ほかないのです。

60

「子どもの本当の名前は何か？」それは「未来」であると。ゆえに「子ども」を育てることは「未来」を育てることといつてよい。(ユゴー)「社会のための教育」から「教育のための社会」への転換を訴えてきた。「人間を作ること」にこそ、現代の行き詰まりを打開しゆく、希望を見い出すからである。

61

「家庭生活の魅力」は何ものにも負けない「強さ」と「正しさ」と「賢さ」を育む源泉

こそ、心豊かな家庭教育であろう。

62

「ほめる言葉」「感謝の言葉」「励ましの言葉」が絶えない家庭は、やはり希望と、自信と、活力に弾んでいる。「声」の力は計り知れない。若い人を「ほめて伸ばす」時代である。青少年に接するときは、八割から九割は「ほめる」「励ます」。あとの一割から二割で「指導する」「注意する」。大人たちに、それくらいの大らかさが求められている。

63

今や、頭脳を満たす情報は氾濫している。だからこそ、大事なことは心に「火を点す」ことである。「やる気にさせる」ことである。やればできると「自信を持たせる」ことである。やればできる、自分にもできると「自信を持たせる」ことである。

64

「何のために」学ぶのかを深く自覚できれば、若き才能の芽は急速に伸びていくものだ。何よりも、まず親自身の心が燃えて、前進していなければならぬ。「心」を燃え上がらせるものは「心」であるからだ。

65

権力者は、青年を見下し利用する。指導者は、青年を尊敬し育成する。いかなる分野であれ、その人物の真価は、個人としての業績だけでなく、後継の流れをどう作り上

げたかで決まるといってよい。

66

裕福になつてほしい。偉くもなつてほしい。そう思うのは当然の親心であらう。しかし、いくら財産を手に入れ、高い地位についても、「人のために役立とう」という心の光がなければ、人間として真の輝きではない。一時の風に高く舞い上がつても、糸の切れた凧のように無軌道に漂い、最後に墮落してしまふ人生であつてはあまりにも無慘だ。

67

テレビなどの映像メディアを見ると、人々は視覚的、感情的に反応するようになります。「動的なもの」に興味をもつものです。それに対して活字で書かれたものを読むには「静的なもの」に反応しなければならぬ。

68

確かに、読書とは違って、テレビなどの映像メディアは受け身のままで見ることができきる。だが、その手軽さや便利さばかりに依存していると、いつしか人間が本来もつ「考える力」や「判断する力」が弱まつてしまふ。

69

「時代」は、どのようにでも変わります。その変化は、協力しあう人びとの「心」の広がりによつて決まると思ひます。新しい変化の風を起こすのは、新しい一歩を踏み出

す勇氣である。

70

真の「21世紀人」になるには、まず胸襟を大きく開き、自分と違ったところのある人に差別や偏見の心をもたないことです。そして交際のなかで互いに理解し合い、意思を通わせ、「慈悲の心」「愛の心」を育むことです。「相互利益」そして「人類益」こそ21世紀の外交のキーワードとなろう。

71

「偉大なる愛情は、深い智慧と切り離せない。智慧の広さは心の深さに等しいものである。それ故、人間性の最高の高みに達するのは偉大なる心であり、それこそが偉大なる智慧なのだ。」

72

大事な大事な時に、人の奥底の、心の振動は厳しくも明確に顯れる。人の心は恐ろしいものだ。「心の卑しき人間、自己の利害だけに生きる人間、虚栄で自分を飾る人間」それらは、大事な時に、その仮面が必ず剥がれる。

73

人間として、いずこにあっても、大きな深い目的を忘れてはいけない。いかなる苦悩の天地にあっても、いかなる厳しき戦いの大地にあっても、絶対に不幸に揺り動かさ

れることなく、君のいるその場所で生き抜き、戦い抜き、勝利していくことだ。

74

違いがあるからこそ、対話によって新たな価値が生まれ、新たな発見も得られる。対話という鏡に照らされて、人は他者を知り、自分を知る。対話が自己の殻を破り、人間を大きくするものだ。

75

この濁り切った複雑な人間世界、「話せばわかる」というほど単純なものではない。しかし「話さなければわからない」ことは明確にいえる。人と会う勇氣、語る勇氣をもつことだ。

76

「言葉が種となる」韓国のことわざ。対話を通して蒔かれた種は、時とともに花を咲かせる。眼前の一人は、一人ではない。その人の背後に家族があり、友人がいる。後継の若人がいる。対話の中に対立から協調への起動があり、平和の懸け橋が築かれる。

77

「戦争の英雄の銅像は無数にある。しかし平和の英雄の銅像は少ない」「戦争でたくさんの人を殺した人間の記念物はたくさんある。しかし、人の命を救い、友情を結んだ人を讃える記念物はあまりにも少ない」

78

「当代随一」と仰がれる、宮大工の棟梁が弟子を取る際、基準を定めている。それは、不器用なこと。なぜか、器用な人はある段階までは早く上達する。だから仕事を甘く見て、楽をすることを覚えてしまう。結局は成長の伸びが小さいという。

79

「千年の大建築」を手掛ける宮大工の世界では要領や、小手先などは通じない。遅くても一つ一つ階段を上らなければ、大きな仕事を成すことはできない。

80

幸福は人生を輝かせるためには、真面目に、地道に、誠実に戦い抜いた人が、必ず勝つ。いかに才にたけていても、苦労や下積みのない人生はもろい。落とし穴につまずきやすいものだ。

81

無名でいい、特別な才能など必要ではない。ただ真つすぐに生き抜いた人が、勝利の春が訪れることを忘れまい。

82

人間は大抵の場合、そんなに極端な違いや力量の差があるわけではない。しかし、「心」一つでその人が変わっていく場合がある。「心」こそ不思議なものだ。

83

人生は永遠に戦いであり、断じて勝ち抜かねばならない。不知恩の人間だけには、断じてなつてはならない。樂觀主義とは「希望」のことである。私たちは、どんな逆境でもはね返す力を持っているのだ。

84

一般的なりーダーは組織が大きくなると、小さなことは他人まかせにしてしまう傾向があります。しかし組織が大きくなっても、小さなところまで気を配っていけるのが、真の指導者なのです。

85

若さとは、何ものにも屈せざる力だ。雨が降ろうが、風が吹こうが、晴れ渡る青空をめぐして伸びゆく力だ。若さとは、何ものも恐れぬ魂だ。いかなる壁にも怯まず、雄々しく突き破り乗り越える大闘争心だ。

86

勝つために、「誠実」を尽くせ。何物にも揺るがぬ自分を創ることだ。「二度とない出会い」その決心で目の前の一人と友情を結び合え！

87

戦いの勢いはリーダーの声で決まる。確信の響きで皆の心を一変させゆけ。リーダーは勝負の急所を見極めよ。的を射た一手一手が勝利の万波となる電光石火の名将たれ。

88 外交戦は「心」であり、「言葉」である。誠実の力で勝つ。時を待つな時を創れ、気取

を捨てた真剣な一人が空気を一変させる。

89 今まで通りは情性だ。徹底した見直し、意識改革で未来を開け。もう一步、たとえば歩でも前進しよう。この人こそ、真の勝利者である。

90 同じ太陽に照らされ、同じ日々を送りながら、一生というものはさまざまである。共通の道を歩みながらも、同じ結果が出ないという矛盾もあまりにも多い。ともあれ、この世に生を受けた以上、満足に生きねばならない。幸福に生きていかねばならない。勝利の人生であらねばならない。

91 悩み疲れて、この人生を終わってはならない。苦しい現実から、満ち足りた充実の一生を生き抜いていかねばならない。

92 「悩みから力が湧き、健康が生まれる」「悩みは、ねばり強くし、鍛えてくれる」人はどうあれ、社会はどうあれ、自身の正しき信念に生きゆくことは最高に尊い。

93 戦いがあるから、人は自己の建設と境涯を開くことができる。そこに限りなく広げられた幸福の大海原が待っているのだ。

94 戦いがなければ、よごんだ水が腐るように自分で自分の成長を止めてしまう。この世に生きた歴史も残せず、暗い無意味な一生で後悔して屍をさらすだけだ。ゆえにどこまでも月々日々、汝自身の戦いを起こし続けよ。

95 人の一生とは「選択」の連続といってよい。人生の途上にあつて、人生は幾たびとなく岐路に立たされる。その時にいかなる道を選び取るか。この「決断」に、その人の信念が凝結する。

96 人間も人間との出会いの中で育まれ、鍛えられる。偏見は「知らない」ところに根を張る。だからこそ「○○人」ではなく「○○さん」と呼び合える人間の絆を身近に結んでいくことであろう。

97 使命の人生に引退はない。人間としての尊貴な責任を厳然と果たしゆく人は、老いを乗り越え、死さえも勝ち越えている。

98

長寿の秘訣は「くよくよせず、前向きに」「グチや悪口を言わない」さらに「人間として生まれてきたからには、いつも世のため、人のために尽くしていくこと」と語っていた。

99

「最後に勝利する人とは、たとえ転んでも立ち上がり、再び前へ進む人です」そして、そういう闘いを貫いていけるかは「心」いかんによるのです。「第三の人生」とは、「第三の青春」の異名であります。

100

物質的な豊かさ、すなわち「量」を追い求めるだけでは、十分ではない。人生の「質」を高めるものこそ、文化の力であろう。文化を守り、育むこと。それは努力という言葉では足りない。戦いである。精神の戦いである。人間の尊厳のための闘争である。

101

戦前の日本は「軍事力」が先走りし、そのあとを人間がついていった。戦後は「経済力」のあと人間がついていった。

102

今こそ人間性の真髄である「文化力」で世界に理解と友情と協力の道を開いていくべきだ。政治や経済のみでは、利害や権力の論理に翻弄されてしまう。「平和の文化」と

は、庶民が力をつけることである。持続的なものでなければならない。その成否は青
年である。

将軍学

其の9

1 「世界を変えたいと思うならば、人間を変えなければならない。人間を変えたいと思うならば、自分が変わらなければならない」。自分を変え、人間を変え、そして世界を変える。それが文化の力だ。（未来への選択）

2 豊かな森林も、一本の木の苗から始まる。滔々たる大河も、一滴の水から始まる。よりよい社会の建設も、一人の人間から始まるのだ。

「いつか」ではなく、「今」から！

「どこか」ではなく、「ここ」から！

「だれか」ではなく、「自分」から！（未来への選択）

3 勝利は突然やってくるものではない。日々の懸命な「小勝利」の積み重ねの上に「大勝利」があるのだ。

「勝負を試みれば、人の真価が分かるもの」（ギリシヤ大詩人ピンダロス）勝つことは幸福だ。勝つことは愉快だ。（平和の旗）

4 「人生の幸福は、困難に出会うことが少ないとか、全くないとかいうことにあるのではなくて、むしろあらゆる困難と戦って輝かしい勝利をおさめることにある」。

5 生あるかぎり、希望はある！希望がなくなる唯一の場合、それは自分自身が「もう希望はない」と決めつけたときだ。そのときだけ、はじめて希望は消えていくのだ。（人生は素晴らしい）

6 人生、どんな絶望的な苦しみであろうと、意味がないわけではない。その不幸に打ち勝って、より強く、より深く、より善い人間になれるよう、人生がチャンスを与えてくれているのだ。苦しみは、試練なのだ。試験なのだ。乗り越えよ、先に進め、というシグナルなのだ。未来への「踏み切り台」なのだ。

7 「人生には、さまざまな痛手を受けることがある。心の傷が癒えないこともある。必ずしも夢のすべてを實現できるわけでもない。しかし「達成できる何か」はある！何か「実現できる夢」は必ずある。だから、最後に勝利する人とは、たとえ転んでも立ち上がり、再び前に進む人である」。「死」を迎えるのは「疲れた人間」ではない。「歩みを止めた人間」なのだ。そういう戦いを貫けるかどうかは…「心」で決まる。（ライサ夫人のメツ

セージ)

8 「身は生きながらも、心は死んでいる者」があり、「身は滅んでも魂は残っている者」もいる。心が死んでいては、生きていても何の意味があらうか。魂が残っていれば、死んでも何を失ったことにならうか。(吉田松陰)

9 人間が革命されなければ、社会が善くなるわけがない。「水が濁っているとき、器を変えただけで、きれいな水鉢になることはない」。

10 人生、同じ生きるならば、最後に「ああ、我が一生は面白かった！何もかも、できることは全部やりきった！」。そう言えればなんと幸せだろう。

11 「人間は戦うために生まれた。進みに進み、勝つために生まれた。これが幸福と平和につながる人生の意義である。人生は勝利のためにある」。

12 人生は勝負だ。勝たねば不幸である。前進は勝利に近づき、停滞と後退は暗く悲惨なそして不幸な現実が待っている。

13 人生は師匠によつて決まる。人生は同志によつて決まる。そして人生はいかなる勝負も勝ち抜ける、厳しい厳しい苦勞と忍耐と決意によつて決定される。

14 一日また一日、自らを磨き自らを向上させ、自らが勝利者になりゆくことだ。厳しき訓練によつて上達していけば最も喜んでくださるのは、師匠である。

15 繰り返し、繰り返して継続すれば何時の間にかその道に上達する。而して一事に上達すればそれが他事にも通ずるものである。

16 師匠を持たぬ者は、人生の生きがいも、希望と歓喜も浅くなる。そしてまた、その人生の希望も歓喜も妄想に流される。

17 青年時代に物質面で満足しきつて、何の人生の土台の修行ができようか。青年期に苦勞することだ。悩むことだ。苦しむことだ。勉強することだ。奔走しゆくことだ。そして自分自身を革命することだ。(平和の旗)

18 今日も行動することだ。明日も戦うことだ。間断なく、人々のため、社会のため、未

来のためという目的を深く遂行しゆくことだ。これが青年期だ。(平和の旗)

19 青年にとって、信用は何ものにも替え難い財産である。職場で地域で、いなければならぬ「絶対の人材」になることだ。

20 人生の勝負は、その長さでは決まらない。真の人生の喜びも充実も人のために行動する中にある。

21 「人間の脳は自己保存の本能の働きで、嫌いな人の話はそれがどんなに正しくても受け付けないものだ。それでは、力を出し切れない」。

22 人を育てたりするためには、まず相手を好きになり、好かれることだ。人間だから嫌いなタイプはあるだろう。でも、逃げないで相手を好きになる力を鍛えていくのだ。

23 実力が発揮できない人に多いのは、目的と目標を混同していることだ。脳は「統一・一貫性」を基盤にものを考える仕組みになっている。「統一・一貫性」とは、スジが通っている、理にかなっている、バランスがとれているということ。

24

脳にとっては、目的を達成することの必要性が明らかにされていないと、その目的を達成することにつながっていない。我々はよく「頑張ります」と言うが、何を頑張るのかを言わないと意味がない。「目的」を達成するための具体的な「目標」が重要だ。

25

失敗や成果が出ないことを責められてばかりいる人間は、自分を守るために失敗を隠すようになる。その原因を追究し認めるところか、それから逃げるために自分にとって都合のいい理由を考え出してキレる大人になる。そんな人がリーダーになれば、相手の欠点どころか違った意見の人間までも許せなくなってしまう。それでは人間の多様な可能性は摘み取られ、社会は衰退してしまふ。

26

陰の労苦をいとわない心が、最高の自主性だ。陰で戦う心こそ、社員を最大限に成長させる原動力になるのだ。

27

上司と社員に最も大切なものは「信頼」だ。団結を生むメンバーが一つにまとまって力を発揮するうえで最も大切なのは、語り合えることである。

28

人間は、自分の長所も短所も深く知ってくれている人の言うことには、素直に耳を傾

けるものだ。そこまでの関係を社員と築けるかが勝負である。

29

汝の人生は建設であり開拓だ。そして汝の人生は闘争であり勝利だ。志と勇氣と智慧と、そして創造力があれば局面は一新され、さらに新しい創造を成し遂げることができる。

30

悠然たる人生を生き抜くことだ。人生の楽しき日々も、苦しき日々も、自分自身が決めることだ。決して人びとを羨んで、泣き崩れるような悲惨きわまる自分自身になるな。それは、いくら悔やんでも負けである。

31

創造の世界は常に行詰りとの戦い。「時を置かずその場で、スタッフの悩みを解決する」という現場主義を大切にしたい。

32

人間、壁に突き当たったときに放っておくと、悩みや不安がどんどん増していく。そんな時、周囲のアドバイスや激励があれば、どれほど助かることか。もちろんそれが早いのに越したことはない。

33

問題点を見つけたら、その場で解決に当たる。「現場主義」とは「スピード主義」。陰

の場所に陰の人に、こまやかに心を碎け。

34

小さな事故は、大事故の警鐘である。そこで油断を排し一念を転換して、すべてを再点検、再考していくならば、大きな事故や失敗を未然に防ぐことができる。事態を真摯に受け止めて決意を新たにすることによつて、事故も成功の飛躍台にできるのだ。

35

自分に打ち勝つ勇氣を持つことである。人間というものは、自分のことに關しては甘く弱いものだ。普段強そうなことを言つていても、いざ自分のこととなると、いつていることの半分も実行できない。また、よいことは自分の手柄にし、悪いことは他人のせいにする醜い面もだれもがもっている。その弱い自分、醜い自分に打ち勝つことこそ、最大の勇氣だといえる。

36

自分のなすべきことに情熱を燃やすことである。いまやるべきことに全力をそそげない人に、未来を語る資格はない。足元を着実に固めてこそ、次の大きな飛躍があるのだ。

37

老いの美しさ、美しく老いること、それは人生のいかなる時期の美しさにもまして、尊い美しさではないだろうか。老い、あるいは晩年というのは、人生の秋であり、そ

の美しさは、いつてみれば、紅葉の美しさなのではないかと思う。その意味では、青春の美しさは青葉の燦きに譬えられるかもしれない。もちろんその眩しいほどの美しさは、たしかに此類ないものであるが、そこには若さゆえの浅さというか、ひとたびそれが失われたあと、そのまま朽ち、枯死していく脆さを、少なくともその可能性を危惧させるものがある。それに比して、老いの美しさというものには、ある深さがこめられているようである。

38
人生ほど有為転変の激しいものはない。往年の有名人の悲しい末路が、ときたま紙上をにぎわすこともあるが、老境に入り、いよいよ人生の輝きを増し、生き甲斐をもつて逞しく生きゆく一生でありたい。

39
それは、人生に取り組む不断の姿勢によるものであろうが、人生の勝負というものは、最後の六十代の勝利ではじめて飾れるのではなからうか。

40
老醜、老残などという言葉があるように、グ老いグというものはとかく否定的に考えられがちである。しかし、だれしもが必然的に迎えなければならない。グ老いグとは、ある意味では人生の総決算、総仕上げであり、その生の完結である。

41

人生のほんとうの勝負というものは、老境に至って決まるものである。最後の姿がその人の人生のすべてといえると考えてきた。半生を一つの砥石として磨き上げた清冽な生命の輝きが、そのまま昇華されていくわけである。逆に、怠惰と憂うつ半生は、その老いの姿にもまた不幸な影を宿しているもののようである。

42

「偉大な人」とは、平凡であることの偉大さを知った人のことである。だから威張ったり、自分を偉く見せようなどとはせず、ありのままに誠実に生きることが大切である。むしろ、立派そうに見せるために苦勞することは、その人の力のないことを人に示すようなものである。

43

真実の人間の偉大さとは何か。尊さとは何か。それは「有名」の二字でも、権力や富裕でもない。一個の人間として、大満足の人生であったか、否か。それが人間の価値であると信じたい。生老病死の苦悩の流転か、そこに生きる力と尊さを見いだすか。人間性の明暗は、そこにつきるように思われる。

44

目を、人間の自己完成という点にそそぐとき、外形的な相違に一喜一憂する浮き草のごとき人生から、確固たる、地についた人生におもむくことは明らかである。

45

そして、このしっかりとした人生観をもつとき、むしろ安易な不平等感をいだかせる社会の通念を打破し、変革する力強い人間が誕生するであろう。そのような人間に一人ひとりが遅しく成長することが、何よりも大切である。

46

人生の完成とは何か。これはせんずるところ、自己の人間としての完成であり、今世はもとより永遠の未来にわたる福運の確立にある。(P. 18)

47

一生は夢のごとくであり、生命は永遠なのである。思えば、この一瞬の生命は、いかなる財宝よりも尊い。この大事な一瞬一瞬を、無為に過ごしてはならない。

48

人間にとって、使命に生きるほど尊いことはない。何のために生まれてきたか、何のために生きるかを知らぬ人生ほど、むなしいものはない。

49

ここには使命の自覚はない。あてもなく、彷徨うがごとき人生——人はしばしば、そこにはかない夢を求める。だが、彷徨いは傍目に自由があるように見えるに過ぎない。彷徨いをつづけなければならない当人にとっては、生の基盤なく、あすへの不安と心の空虚とに悩み苦しむ日々であろう。使命なき人生とは、彷徨いの人生のごときもの

である。(P. 19)

50 人生は生涯、建設である。建設が失われた人生は敗北である。死を賭けた生き方——それが生きるということの充実感を自覚させる発条であることは確かである。

51 人生行路の行く手には、ことごとく未経験な未知の世界が待っている。苦労や危険を避けられるものではない。それが人生の実相であると覚悟したとき、人はまず絶望を克服するであろう。

52 才能には限りがある。運、不運も重要な鍵になってこよう。賢者がかならずしも成功するとはかぎらない。愚かそうに見える人が、また思いもよらぬ大成をなすことだってある。それが、複雑微妙な世間のことわりである。

53 人間は、禍を福となす力をもっている。その力は失敗を乗り越え、転換し、勇敢に立ち上がって次の人生の出發とすることによってためされる。その力を完全に發揮して、見事に再起した人こそ、偉大な人間といわれるのである。結局、人生は勝負である。だから、あなたはその勝負に勝ちぬかなければならないのである。

54

人生の充実感は、けっして物質的な満足感だけで決まるものではない。むしろ大事なものは、人生の最終時点で過ぎ去った一生を振り返ったとき、自分は何にも悔いるところはない、ほんとうに自分は自分らしく力を出しきった、といえるかどうかである。

55

岩にさえぎられた苗木は、まっすぐに伸びることはできない。かといって温室で育てたものはやく生長するが、風雪に対する抵抗力は弱いものである。伸びのびと自由な空気のなかで、しかも自然な試練のなかに鍛えられていくことが、本人にとってもっとも幸せな道ではないだろうか。(P. 22)

56

健全な生涯を送るべきもつとも重要な条件は、自己の一生を賭けて悔いない理想をいだいて、その実現のために情熱をかたむけて専念することではないだろうか。私は社会に貢献し、人類の未来に思いをはせ、そこに自己の生きがいと使命を見いだして精進することが、どのような健康法にもまさる人間にのみ与えられた特権であると主張したのである。

57

たしかに、人生には反省も必要であろう。反省のない人に向上はありえない。だからといって、反省が自己嫌悪になつては無価値となる。それはあくまでも、あすへの向

上のためのものでなければならぬのだ。また反省がつねに過去のことにはこだわって、それから抜け出せないような生き方は老いた姿であって、青春の若々しい、これから可能性の豊かな人生に生きる人の態度ではない。

58 現代人の最大の不幸は、自分自身というものを冷静に見つめ、人生を自らのつくる作品として、これに主体的にかかわりあうゆとりを失ってしまうことにある。

59 物事にはすべて急所がある。急所を把握したうえで人生を歩み、社会生活をおくりたいものである。急所を知らずに努力しても、空転に終始する場合が多い。要領よくということと勘違いされそうだがそれとは違うはずだ。急所とは、つねに百パーセントの努力と真剣な姿勢の人のみに体得されるものだ。

60 人生は、最後の一瞬まで建設の連続でありたい。この心構えを生涯もちつづけたかどうか、その人の人生の価値を決定するといっても過言ではない。

61 信用というものは、積むに難く崩すに易いものだ。十年かかって積んだ信用も、いざという時のほんのちよつとした言動で失ってしまうこともある。

小才で表面だけ飾ったメッキは、大事な時にはげてしまうものである。苦難のなかをまっしぐらに自らの使命に生きぬく人こそ、最後にあらゆる人の信用を勝ち得るものではあるまいか。毎日、地味でだれも見えていないような仕事をしていても、それを大切に、一歩一歩を忍耐強く自己の建設のために進んでいく人こそ心から尊敬したい。

力のない、福運のない人間ほど、虚栄に走り、虚飾で自分を包もうとするものである。これほど苦しく愚かで、悲劇であり、時として喜劇の人生はない。大切なことは、あわてず倦まず、自分らしく着実に自己の成長に励んでいくことである。

考えようによつては、一日二十四時間、どんな乗り物を使って、どれだけ動き回ったとしても、これだけは変わりがない。いうならば、どこにどうしていても、自己の「存在」だけは厳としてある。その自己をどう充実させるかが一日の充実につながり、ひいては、豊かな人生、社会をわが掌中にするか否かの鍵となるのではあるまいか。便利な環境自体が豊かなのではなく、その便利さをどう自己の人生の充実へと使いこなしていくかの知恵が、豊かさを形成するものだと思う。

一日一日が決戦である。きのう成功したから、きょうも成功するとはかぎらない。き

のう悪かったから、きょうも悪いということとは絶対にありえない。瞬間瞬間の実相が大切なのである。その差し引きの実体が、福智となり、一生の総決算となる。

66

この世は娑婆世界、すなわち『堪忍の世界』であり、人生はもともと苦勞の連続といえるかもしれない。よって苦勞に即して樂しみを開拓していく以外にないのである。『苦しみ』と『喜び』との総トータルが人生である。そして『苦しみ』のほうが多かったか、『喜び』のほうが多かったかということ、最後の人生が決まるような氣がしてならない。

67

誇りにできる人を同志にしたい。友にしたい。後輩にしたい。人生の最大の幸福は、生涯の師をもつことだともいえる。どんなに有名になり、成功しても、師のない人生は淋しい。

68

鳳は大地を蹴って飛び立とうとする瞬間、最大の力を出す。飛躍的な成長の過程は、いくつかの苦悩の壁を破る道程でもある。苦しみを乗り越えたあとには、見違えるような、広びろとした戦野がひらけてくるものである。

69

人間である以上、だれにでも過ちはあろう。間違った見解に陥ることもある。しかし、過ちを指摘されたときに率直に非を認め、大胆に攻めるかどうかで、進歩の人が保守の人か、また善意の人が悪意の人が決まってくる。

70

悲しんでいても一年、喜んでも一年、苦しんでも一年、楽しんでも一年に変わりはない。ならば、一步成長の喜びの一念であってほしい。

71

「断は確信に通ず」決断力。これこそ戦いにあたって不可欠である。自ら決断し、行動する。そこからすべてが開ける。

72

「強い意志は、人間に生まれつき備わっているものではない。それは育っていくものなのだ」。勉学に頑張ろう、体を鍛えようという人は多い、結果も点数や記録等ではつきり分かる。

73

一方人間を鍛え、磨き続けることはなかなか難しい。だが着実に人格を磨き抜いた人こそが真の勝利者と輝く。

74 発展する組織は、報告・連絡・相談が迅速だ。友の心に電光石火で応えよ。

75 批判するほうが楽で、評価すべきことを評価するほうが度胸がいる。(田原総一郎)

76 どんな植物も「自然」の法則を離れては育たない。人もまた「社会」の中で成長する。「人間Ⅱ人の間」というように、人との関わりによつて磨かれて、使命を大きく結実させゆくことだ。

77 この社会を成り立たせている根幹は「信用」、「信頼」といつてよい。それは交わした「約束」を一つ一つ誠実に遂行する、その行動でしか築き得ない。

78 自分自身と約束した目標を完遂する仕事には、すべて「約束」という行為が含まれる。「青年の一番の宝は信頼である」。

79 青年は財産や名誉などなくとも、信用されることが最大の誇りであり、勝利である。たとえ失敗しても、ごまかしたりしない。誠意を尽くして対処する。

80

反省は反省として決して気を落とさず、同じ失敗を繰り返さぬように努力して、必ず挽回してみせるのだ。青年は「いなくてはならない人」へと自分を価値あらしめていくのだ。

81

組織が大きくなって人間が増えたと、各自が自分に責任があると思わなくなる。自分が仕事をしなくても、組織が仕事してくれると思ってしまう。組織は仕事をしない。

82

社会人としての基本を確認しておきたい。第一に「清々しい挨拶」である。挨拶は明快な声ではっきりと。お辞儀は、頭を下げ腰を曲げてしっかりと。名刺の受け渡しは、先方がこちらの名前を読み取れるようにきっちり。身だしなみは清潔に、新人の時にこそ確かな作法を身につけたい。

83

「人に何かの世話になったら、何でもいいから、すぐに礼をすることだ」。社会で勝ちゆく起点は「朝に勝つこと」である。朝を大切にすること。それは時間を大切にすることだ。

84

もう一つのエールは「愚痴をこぼさず前へ前へ」である。思い描いた理想と違う職場で働く友もあろう。人が羨ましく見える時もある。しかし大事なことは、今いる場所

で勝つことだ。眼前の仕事を忍耐強く成し遂げていくことである。忍耐は偉大な仕事を生み出す根源である。

85

苦勞知らずで偉くなった青年は、不幸だ。眞の人生の深さがわからないからだ。苦しみ抜いてこそ本物が育つ。思うようにいかない時もくさつてはならない。上手くいかない時も自分らしくベストを尽くしていけば、必ずそこから次の道が開かれる。

86

誰かに愚痴をこぼしても何も生まれない。すべてが勉強だ。どんなことも自分の成長の力に変えてみせる。そう肚を決めた人間は無敵である。いかに意地悪な人間も、その誇り高き魂だけは絶対に侵すことはできないのだ。

87

仕事の四つの要諦

① 好機と見たら、断固決断することが望まれる。弱気になつてはならない。

② 辛抱すべきときには、あくまで我慢に徹することが望まれる。腰くだけになつてはならない。

③ ものごとの処理は、思慮深く沈着であることが望まれる。浅はかであつてはならない。

④ 変化の対応は、機敏であることが望まれる。手遅れになつてはならない。

88 いかなる道であれ、「その道の達人になろう」と決めることだ。自分のいる場所でプロになれ、一流と輝け。

89 努力と苦勞を重ねて築き上げた歴史、勝利した歴史、逆境を乗り越えた歴史のみが消えることのない「金」の輝きを放つのである。

90 偉大な事業は、安直に成し得るものではない。民衆が勝ち榮えていく次代を建設するためには、世代から世代へ継承しゆく、持続的にして多角的な建設が必要である。

91 人間が、人間であること——これほど易しくみえて、難しいことも、おそらく他に類がないだろう。古来、ある人の人格を知りたいと思つたら、その友だちを見ればよいといわれる。友だちは、その人の心のあらわれであるとともに、逆にその人の心の変化にも強く影響を与えているものなのである。

92 人間の価値というものは、その人物の没後に広く再確認される場合もある。それも死

後まもなくということもあれば、百年、二百年たつてからということもある。ともあれ人間として誠実に生き抜いた人にして初めて、その価値がいぶし銀のように時代を超え輝くのではないだろうか。

93
どんな欠点をもっている、誠実な人は接しているすがすがしいし、やがてはかならず幸せをつかみ、人間として大成し勝利しているといえよう。しよせんは、人を誠実でつつみこんでいてこそ、相手も世間も同感をよせてくれるものである。

94
有名人は、「有名」の二字がなくなれば、その高い位から落ちてしまう。財力による人は、「財力」の二字がなくなれば、はかない悲惨な人生になってしまう。権力によるものは、権力によって倒されるということとは、歴史が多く語ってきたところである。

95
ありのままの人間。これは、醜いときには、それ以上に醜いものはないが、誠実な美しい人間性は、またこれ以上に美しいものはないはずである。そして、これ以上に感動的なものはない。

96
路傍の石をいくら磨いても光は出ない。金剛石を磨けば、燦然たるダイヤモンドの光

を放つ。エビの種のまずいものにいくら味をつけても、エビ本来の純粹な味は出るはずもない。エビにかぎらず、人間もまたそうである。社会的な地位や、名声や、家柄や、権力などのいっさいの虚飾をはぎとつた後に、その人間の純粹の味があるのだらう。味のある人間とは、このかくされた人間性を意味するのである。

97 人間の眞価は、學歷や、地位の名声や、財産だけで決まるものではない。それらを取りのぞいた、その人自身のもつ人間としての實力、人柄、そしてつねに自己の建設を心がける情熱によつて決まるといえる。

98 おそらく、人間である以上親に育てられ、師に教えられ、社会の恩恵を受けた事實は誰人も否定することはできないであらう。もしそうした事實に少しでも感謝する気持ちがないとしたら、その人はもはや人間ではなく動物以下だといわれてもやむをえない。そして、その人はかならず人びとから見捨てられ、悔い多い人生を送る場合が多い。

99 一つの目標、一つの目的に向かつてバイタリティーに富み、全魂を打ちこんでいく姿は美であらう。その反対に時流に流され、右顧左眄する小才のきいた人間ほど、醜いものはない。美しくありたいと願うならば、自己の信念に生き、理想に生きること

ある。

100

よく、他人の虚栄にだまされる人がある。その人は、自分も虚栄心が強いと考えなければならぬと思う。また、他人の評判ばかり気にしている人、ほめられるとすぐうぬぼれる人、けなされれば相手を恨む人なども、虚栄のとりこにされがちな人である。虚飾にみちた生活にはよけいな苦勞が多く、それは根なし草のようなはかない毎日ではないだろうか。

101

虚飾の恐ろしさは、なんといっても人間が人間たることの尊い人間性をも捨ててしまふことにある。虚飾は人間に対して復讐し、やがては、その人を最低の不幸な人間としてみまうのである。

102

人間の奥行きと広がり、これを別な観点からいえば、その人の世界というのである。その人の持ち合わせている世界の境界線が、どれほどの奥行きと広がりをもっているか。ここに人間の魅力のもつとも根本的な要因があるように思われるのである。

103

奥行きと広がりをもった人間を育成するには、知識や技術だけでは不十分である。知

識や技術は、人間の属性である。その知識、技術の習得と錬磨をおし、己自身を磨かなければけつして深い自己の世界の構築はありえないであろう。

風につられて動く、あてにならない社会の眼玉を恐れるということは、ばかげたことである。

将軍学

その 10

1 ユーモアのある人は、人をあきさせない。ユーモアのある話は、人に威圧感を与えない。だからこれからの指導者は、ぜひともユーモアが必要であると思う。いや、指導者でなくとも、たんなる日常生活でもユーモアは多くの効用をもつものである。

2 人間のみが、笑いとユーモアをもつ特権者である。日本の国でも、国民個人個人が、職場でも家庭でも、また多忙できびしい世の中にあっても、つねにユーモアを忘れないで、語り合い、接し合ったならば、どれほどかなごやかで、楽しい社会が建設されることであろうか。

3 人を慈しみ、人に好かれよ。相手に好かれずして、その人へ善意が届くものではない。責任ある人は知恵が湧く。責任回避の人は悪知恵が湧くものである。自分で蒔いた種は自分で刈り取ろう。

4 庶民は、雑草のようである。しかし、雑草も生えない野原に、草木が生い茂り、果実

が実るはずもない。庶民の強靱な生きかたには、時によつては哲人や宰相にもない、人生の真実が含まれているものである。

5 青春とは、単に年齢的な、また肉体的な若さというだけのものではないと思う。青年期の信念を死の間際まで貫き、燃やし続けるところに真実の青春の輝きがある。

6 どんなに素晴らしい成果を残しても、時に落ち込む時がある。太陽だって沈む、明日は必ず日が昇る。

7 青春とは、単に世間をうまく渡ろうとする姿勢であつてはならない。そのまえに世間というものを、社会の姿、根底を、鋭く見抜く力を養ってもらいたい。知ることは一つの力である。

8 青年は、安易に妥協しながら生き抜くのではなく、勇気と英知をもつて社会にぶつかり、艱難をなめつつ成長して、いつてもらいたい。

9 世間、社会には、たしかにさまざまな矛盾と改善すべき問題が山積していることだろう。

しかし世間のせいになっているかぎり、真の意味で自己の成長はない。自身に力をつけ、世間の荒波に翻弄されるのではなく、逆に世間に働きかけ、環境を変革しゆく人間へと成長していくべきである。

10 過去の価値も、現在という時点に流れ込んでいくし、未来図はまた、現在のなかにその要因をはらんでいるものである。

11 老人は過去によつて現在を批判するのではなく、過去のよりよきものを現在に投射し、若者は現在を正しくとらえつつ未来の設計図を描くのでなければならないといえる。また現在に生きる壮年は、過去を大事にし、未来を念頭におきつつ現在に対応すべきである。

12 あらゆる世代が、よりよき現在と未来のために英知を投入していくしかない。断絶を解消するというより、それぞれの持ち味を止揚せしめ、調和させていくところにいつさいの原点があると考ええる。その共通の認識基盤にたつときに、初めて話し合いも実のあるものとなる。

13

青年の特質は、純粋な熱情と、それを思うままに燃やそうとする「志」の大きさにあるようである。青年が青年らしく生きるとは、己の「志」に殉じ、もてる力を悔いなく発散しきつていくことにほかならない。

14

青年は、おのおのの厳しき境遇で多くを学び、そして働き、力を満々と身につけることだ。しよせん、人生は勝負である。この真剣な生活のなかにはじめて自己が磨かれ、人格も強く、しかも豊かになっていくのである。

15

浅薄な知識のレッテルのみでは、ゴミを身につけて飾り立てたつもりでいる猿と選ぶところがない、と。やすやすと、よそから買って身にとってつけた「教養」ではなく、その人の生命の内側から、皮膚の下から輝きだしてくるような、ほんとうの教養を守り育てていきたいものである。

16

小心は、青年の最大の欠点である。青年よ、いかなる人生劇場においても出演者たれ。ともかく青年時代は、自らの輝かしい未来のためにあえて泥まみれ、汗まみれの実践を自らが強行して、崩れざる人間の芯、背骨を確立していくことが大事である。その芯があれば、年月の経過とともにまた、社会の風波に磨かれて、具体的な結果がおの

ずから現れてくることは間違いない。

17 青年は時代の潮である。人が年をとることは自然の道理である。これを社会全体として見たとき、それは世代の交代となつて現れてくる。

18 少年は青年となり、青年はやがて壮年になろう。あたかも、大海の巨大な潮流を、いかなるものも止めることができないように。そしてまた、地球の自転を止められないように、青年は次の時代に向かつてすさまじい勢いで突き進んでいく。ここに革命がある。真実の革新がある。躍動する生命それ自体の力がある。

19 一国の興亡盛衰は、次代を担う青年によつて決定づけられるといつても過言ではない。その国の青年が、いかなる指導者のもとで、どのような成長を遂げているか。またいかなる人生観、社会観をつちかい、どれほどの息吹きで進んでいるか。これこそ、国家のあすへの道標である。

20 いずれの時代、いずこの世界にあつても、革命の先駆者はつねに青年であり、なかなく学生または現在の学生にあたるべき人びとである。これは、いったい何を物語る

のであろうか。

21 苦手なことに真つ先に挑戦を！困難な場所で勝つてこそ信頼は広がる。張り切つて人生を生き切れ！

22 外交戦は「声」で決まる。誠実と確信の心からの響きで味方を創れ。信念の人はどんな時も朗らか。微笑みの力は皆を安心させる。

23 「信頼」こそ、人生勝利の土台だ！誠実な人柄と実力が光る「いてほしい人」になれ。ほんの小さな心配りの差が大きな波動を生む。「小事が大事」と深く知る指導者たれ！

24 「負けじ魂」で人生を勝ち抜け、不屈の樂觀主義でいかなる逆境も敢然と打ち破れ！「強敵が人をばよくなしける」。正義の人生に恐れるものはなし、勇敢に勝ち進め！

25 「友情」こそ人生の宝だ。共に励まし挑戦を競い合え。君も我も勝利王たれ！リーダーは、自らの戦いの感動を語れ！生きた言葉が友を鼓舞する。

26 青年ならば、誰れにも負けない「力」をつけよう。努力また努力で「決意」せよ。「行動」せよ。そして、「持続」せよ。弛みなき一歩一歩で大きな人生を生きることができる。

27 大きな目標に挑んでこそ、自分の殻が破れる！きように勝ち、明日に勝つ長き道程だ。戦った人ほど強く聡明になる。

28 一日の目標を明確に、「今日も勝った」と晴れ晴れと飾りゆく進歩の日々であれ。戦いは快活に苦手の所から真っ先に。勇敢なる前進たれ。

29 誰かではない、まず自分が勝利の波動を。先陣を切って起こせ。今、何が必要か、リーダーは心を尽くせ。皆の心を軽くせよ。

30 青年とは、たえざる建設と革新の息吹きの特徴である。すなわち、強く、そして清浄であり、かつ限りなき未来性をはらんだ、若き生命の躍動である。

31 青年時代は、土台をつくる時代だ。土台をつくる前に放棄したり、惰性に流されたのでは、いつになっても家は建たない。

32

指導を受けるよりも、自分は自分で勝手にしたいと思うものだ。だが、自由で気楽だと思っただけの青年期は、タコ糸が切れたようなものである。結局あとになつて損をする。青年らしく自己を建設するためには、情熱と向上が大事である。

33

青年というものの特質からいっても、大きな理想をもつべきである。理想なくして青年の意義はない。だが、それにはかならず周到な用意と、地道だがたゆまぬ努力がともなわなければならない。就職にさいしても、職業人になつてからの人生においても、すべてこの原則は共通であらう。

34

自然も、世界も、宇宙も、一瞬として止まつてはいない。向上を失つた瞬間から、すでに人生の退歩がはじまつている。つねに自分の人生を切り開き、創造し、前進していくことこそ真実に生きていることの証しであり、それが青年の特権である。

35

人生には、いくつかの節がある。厳しい冬の寒さに耐えなければならぬ時もあるれば、春の陽光を燦々と浴びて、すすくと伸びゆく若木のようにまっすぐに成長するときもある。とりわけ二十歳前後の青年は、知識の養分を満身に吸収して、見る見るうちに頭角をあらわしていくものである。

36

未来を見つめて進もう。そこには希望がわいてくる。無限の可能性をあなたは秘めている。明るく生きよう。自分の人生のためにも、また若々しい隣人のためにも。そこには、かならず楽しさがあふれ出てくる。勇気をもつて強く生きよう。そこにはおのずから道が開けてくるだろう。

37

われわれは虚栄のなかに生きている。だが虚栄に左右されず、ありのままの人生を誠実に生きるほど尊いものはない。また強いものはないという自覚のもとに、堅実な人生を歩むべきである。

38

失敗を怖れていては、何もできない。過去に名をなしたいかなる人も、失敗につぐ失敗の人生であったといってもよい人がほとんどである。ただ、彼らはそのたびに不屈の闘魂を燃やして立ち上がり、最後の勝利を飾ったのである。

39

青春時代のほんとうの失敗は、むしろそうした苦闘を避け、目的もなく、無気力に過ごすことにこそある。苦闘したうえでの失敗は、人生の宝ではないだろうか。どうか失敗を恐れることなく、雄々しく、逞しく人生を生き抜いていただきたい。

40 よき種は、よき苗となり、よき花が咲こう。よき少年は、よき青年となる。よき青年は、

よき社会の指導者と育とう。

41 人生、そして社会は、けつしてなまやさしいものではない。嵐もあれば闇もある。そ

れを避けたり逃げたりしてはならない。力いっぱい、真つ向からぶつかっていくのだ。

42 真剣と誠実に裏づけされた努力があるならば、かならず活路は開かれることを忘れて

はならない。苦なくして生命の根底からの楽はない。苦闘なくして人間としてのほん
とうの勝利はないし、自己の成長もない。すべてが人生の教師であると思い、自分自
身を磨いていくべきである。

43 真実の人生とは何か。自分らしく、個性豊かに進む人生であろう。また、人生におい

てもっとも尊いものは何か。自分の信ずる道を、だれがなんといおうと胸を張って堂々
と貫いていくことに尽きるだろう。その上に立って、社会のために、人のために少し
でも貢献できる人生であるならば、これ以上うれしいことはない。

44 よく現実からの逃避というが、もう一步深く考えるならば、それは自分自身からの逃

避であり、自分を見つめることを避けているといえる。

45

おもしろくない、辛い、苦しい等々、いろいろな理由はあるが、だから勉強がいやだ、だから仕事はしたくないというのは、実は自分に対する甘えであり、自己を見つめることを避けた敗北者のつばやきであり、自己の成長のためにはなんの創造的効果もたらさない。逃げる姿勢から生まれてくるのは、ただ不平、不満、批判だけであり、結局それは敗北者の人生である。

46

「すべてのものから学べ」ということである。自分を取り巻くいつさいの事象、その人びとから学ぶという意味である。人生の風波というものは、その人の基本の決心の姿勢ひとつで挫折の原因ともなるし、逆に見事な成長の糧ともなる。

47

これから、大なり小なりいろいろな風波があるだろう。そのときに、それを転じて大きい発展ができるか、反対に挫折してしまうか、全部自分にあることを忘れてはならない。

48

その意味からも、たとえば自分が好きになれない人からでも大きい教訓を得られること

がある。自分の周囲が好きな人ばかりというわけにはいかない場合もある。反対意見の人もいる。しかし、そこにも自分を教えてくれるものが多多あるかもしれない。そういう雅量、大きな心をもつていただきたいのである。

49
どこにあつても、全部を人生の学舎に変えていくというのが、強い人生のあり方である。すべて自分の学舎としながら、吸収していきうという旺盛なる生命力をもっている人が、人間として立派である。

50
仕事の面で、友人とのつき合いの面で、さまざまな惑いや逡巡、苦悩を経験することもあるだろう。しかし安易に苦しみを逃れよう、苦しみを避けようとするところに自身の成長はない。

51
自分一人の孤独の殻に閉じこもるのではなく、自ら動き、語り、自らの課題に真正面からぶつかっていくことである。かならず道は開けていく。眼前の苦しみは大きく見える。だがそれを乗り越えたときには、さわやかな充実感が心いっぱいに広がり、あれほどに悩んだ苦しみも、懐かしい思い出となつていくものである。

52

教育は人間をつくるものであり、学問を身につけることは、良識ある社会人、教養人となるための重要な要素である。またとくにこれから、若い時代に最大限の学問的知識を吸収しておくことが、社会に有為な人材として育つための大いなる力となる。

53

見る人の魂をなごませてくれる美しい花にも、無数の種類がある。個性、特性がある。だがいかなる花も豊饒な大地に根ざしてこそ、爛漫と咲き香ることができる。同じように諸君の個性、特性、特技も人間としての豊かな大地の上に発揮されて、はじめて実を結ぶことを知っていたきたい。

54

その人間としての豊饒な大地の開拓、整地こそ、青年時代における最大の眼目であるがゆえに、いまこそ得手、不得手にかかわらず、一切の問題に真剣に取り組むべきである。

55

青年の時代において大切なことは、よい友達をもつということである。人間は一人では生きられない。両親が愛情こめて育ててくれたからこそ成長できたのである。

56

しかし、人間がほんとうに人間らしく成長していくには、たんなる肉体的成長や知識

の蓄積だけでは十分ではない。人格、人間性といったものを磨くことがどうしても必要である。

57
そしてその人格の形成、人間性の練磨には、麗しい友情が不可欠の要素であると思う。なかには自分には友だちなどいない、自分の道を行くのだ、といって友だちから遠ざかり、自分だけのカラに閉じこもる人もいる。それは、自己の人間の成長を放棄するに等しい生き方であると思う。そういう人は、社会生活を営む人間として失格というべきであり、かならず後悔するときがくる。

58
「人生において」遅すぎることなどない。全身でやるぞと誓うとき、人は青年になる。だから挑戦を始めるのに年齢は関係ない。

59
「きょうから」、「今から」と立ち上がった瞬間、人生の劇は動き出す。そう確信し、勝利への一步を力強く踏み出した。

60
物事の成就には、スピードが求められる場合がある。一方、じっくりとたゆまぬ努力を重ねることで、勝利へと結実するものもある。

61 今日できなければ、明日もできない。今すぐ始めよ。「人間は批判する者と創造する者
とに分けられる」。

62 何かを始める。そしてやり続ける。そして、また新たに始める。芸術においても人生
においても、不可欠なリズムである。それは成功へのリズムであるばかりでなく、生
き抜くためのリズムである。

63 すべての罪惡以上の惡は、恩知らずということである。恩知らず、これ以上の惡はない。
偉くなり、増上慢になると、人は恩を忘れるものだ。絶対に不知恩の人間になつては
ならない。臆病な人間、卑怯な人間になつてはならない。

64 リーダーは声が大事である。聴いてくれる人の心の中に、ぐっと入っていくような声
で友の心を鼓舞していつていただきたい。

65 何でも「一番」を目指すことだ。その努力の中で大きな力をつけていくことができる。
自分より強い者を相手にする場合には、どうせ勝てないとあきらめて、いい加減にな
ることがある。そうすると、せっかく相手に隙があり勝つチャンスがあつても、その

機会を生かすことができない。

66

反対に自分より弱い者を相手にすると、油断してそこにつけ込まれて負けてしまう。油断は大敵である。ともあれ戦うには勝つことだ。特にリーダーは気取りを捨てて、戦うことだ。

67

戦いはこうこれくらいで、と油断したならば、そこから負ける。最後まで粘り抜いた方が勝つ。走り切った方が勝つ。人生は前進だ。

68

戦いの中にこそ、喜びがあるのだ、悩みがあるから成長できるのだ。強敵がいるから強くなれるのだ。自分のことで悩むとともに友人のためにも悩むことだ。

69

人間の本当の偉さは、何で決まるか。財産や名声、美貌などでは決まらない。有名になつて「一時的に脚光を浴びたとしても、長い一生にあつて不幸な流転をたどつてしまう人生模様も少くない」。

70

人間の究極の偉さは、いかなる哲学を持ち、学び、実践し抜いたかで決まる。見栄つ

張りな人間、威張った人間、権力の魔性に狂った人間ほど哀れなものはない。

71 人間は、どうしてもきらびやかな世界に目を奪われがちだ。世間でもてはやされると偉そうに見える。社会的地位が高いと立派に。いずれも愚かな錯覚に過ぎない。

72 自分以上の宝はないのだ。自分を離れて幸福はない。本来、自分ほど素晴らしいものはないのである。自分という最高の宝を輝かせるのだ。これが真実の哲学である。

73 大抵、人を見ると自分と比べてしまう。もちろん人から優れた点を学ぼうという気持ちは大事だ。しかし「あの人はいいな。幸福そうだ。立派そうだ」とうらやんでもつまらない。何もならない。自分自身を磨いて、自分自身が生きがいを感じて生きていくのが勝利の人生なのだ。これを深く心に刻んでいただきたい。

74 自分という確かなものを持つことは、なんと素晴らしいことか。永遠に何があっても揺るがない自分自身の生命をつくり上げていくのが哲学である。

75 あなたがいると会社がどんどん発展する。そう言われる存在になっていただきたい。

また真剣に誠実に努力を重ねていけば、必ずそうなっていける。

76

他人が見ていようが見ていまいがそんなことは小さなことである。誠実に生き抜く人生には何の悔いも残らない。すべての苦勞が生かされていく。「一人」の真心がどれほど偉大か、一つの行動からすべては始まる。一言の励ましから勇氣が生まれる。

77

対話のポイントは「相手に真面目に真実を語る。そして心にあるものを訴えていく」。一対一の対話を積み重ね、友情を拡大しゆく人生が最も尊い。

78

「嫉妬には、傲慢と結びつく特徴がある」。どうか一人一人が多くの後輩たちから「あの人の生きたように」と慕われる、輝く模範となっていたきたい。

79

人との交わりのなかで人間は自分を磨き、鍛えていくことができる。人間の交流は、まず勇氣をもつて対話することから始まる。

80

ともすれば人との関わりを避け、自分だけの世界に閉じこもってしまおうとする。自己の殻を打ち破ることだ。「閉ざされた自分」から「開かれた自分」への転換の第一歩

が対話への挑戦なのである。

81 信頼を勝ち取り、相手にも啓発を与えられる自分になることが大事だ。そのためには、わがままや自分勝手な生き方を排し、日々自分を高めゆく努力がなくてはならない。

82 そこに自身の成長があることを知っていただきたい。友情は一生の「宝」だ。うるわしき交友を重ねながら自身を磨き抜いた生涯こそ、最上の人生であろう。

83 目は「心の窓」だ。どこかにウソや悪意がある人間は、相手を正面から見ることとはできないものだ。とりわけ、自分が世話になった恩人の目をまっすぐに見ることのできない人間、また外面はよくとも陰で何をしているかわからないような人間は、絶対に信用できない。

84 信念に生きる人生は深い。新しい挑戦は新しい勝利を。大切なのは一步前進だ。大変な中でこそ自分が深まり、強くなれる。

85 思い立ったら、まず動こう。心も軽く、昨日より今日、今日より明日と。心を揺さぶ

る誠実の対話で「目の前の一人に」縁を広げよう。

86 本気になって責任を果たそうと思えば、計画はおのずから緻密になるものだ。大雑把で具体性に乏しい計画というのは、成功させようという一念の欠如の表れといつてよい。

87 団結の力がなければ、いくらよい方針であつてもこれを実行することはできない。団結の要はリーダーへの信頼である。

88 人の幸福を願う必死の思いは、必ず通じる。「精神」は「行動」によつて表現されてこそ初めて輝きを放つのである。励ましは「勇氣」の母である。

89 優れた人材としての資質をもっている人であつても、放つておけばそのまま終わってしまう。ダイヤモンドの原石だつて、見つけ出して磨き抜いてこそ、まばゆい輝きを放つ。それと同じである。

90 人材を見つけようとするときは、人の長所を見抜く力を磨くことだ。それには自身の

慢心を打ち破り、万人から学ぼうとする謙虚な心が必要ではない。

91 人を育てることによって、自分も成長することが出来る。「人材は見つけて育てるものだ。共に戦うなかで共に育つものだ」。

92 困難に直面した時、「できない理由」はいくらでも挙げられる。経験したことのない困難ならなおさらだ。だが、そんなことをしても何も前に進まない。それよりも挑戦する心をどこまでも燃え上がらせることだ。

93 「言い訳しない」と決めれば、姿勢が前向きになる。「できない理由」よりも「どうしたらできるか」を考え、努力することだ。

94 地上から大山を見上げて、その高さはよくわからない。しかし、高いところからみれば、よくわかる。自分に人材を見極める目がなく、境涯が低ければ、相手のすばらしさを見抜くことができない。だから自分を見つめ、境涯を高めてゆくことだ。

95 組織の強さというのは、正役職と副役職との連携、協力によって決まるといってよい。

96 正役職者が一人ですべてをやっている、いつか疲れて行き詰ってしまふ。正役職と心を合わせて働いてくれる副役職が、何人もいれば、活動も重層的になる。

97 組織の団結とは、まずこの正・副の団結から始まる。そこから心の連帯が広がり、難攻不落の城の石垣のように、堅固にして盤石な組織が出来上がるのだ。

98 自分が人から認められないのは悩みではない。自分が他人の良さを認められないことこそ悩みである。

99 社会の指導的な立場にある人間が立身出世に狂い、しばしば不祥事を起こし、世間を騒がせる。人の上に立つリーダーこそ栄誉栄達の心を捨て、陰で地道に仕事をしている人を見つけ、たたえていくことが求められる。

100 戦いを決するのは「真剣さ」と「粘り」である。「執念」と「勇氣」である。「絶対に勝つ」という「決意」である。「断じて勝つ」と決めて、戦い抜いたほうが勝つ。勝つために最大の努力を尽くし切っていくことである。

100

鉄は炎の中で鍛えられてこそ鋼となる。見事な剣となる。人間も同じであろう。人生は苦勞したほうが勝ちだ。悔しい思いを乗り越えた人間が最後は勝利するのだ。

101

いざという時にこそ、本氣になつて立ち上がるのだ。意氣地なしであつてはならない。大事なのは努力である。生ある限り努力し抜いていく。努力、ただここにのみ勝利の証しがある。真の美しさがある。悔いない人生がある。

102

感謝を忘れず、向上を続ける人が光る。向上しよう！その心を持つ人は強い。同じ生きるなら、「最高の何か」のために生きるのだ。人生の勝利は、今日一日を勝つところから始まる。